

漆黒の狂襲姫／狂襲姫譚 原典

第二章

著者／流遠亜沙

ASSAULT-SYSTEM 文庫

漆黒の狂襲姫／狂襲姫譚 原典

第二章

第八話 デストラクター……4P

第九話 聖女と魔女（前編）……15P

第十話 聖女と魔女（後編）……33P

第十一話 アポカリプス……59P

第十二話 アウェイクニング……73P

第十三話 魔女の所以……87P

第十四話 アカイト……99P

漆黒の狂襲姫／狂襲姫譚 原典

第八話

初体験の相手は実の父だった。

母の火葬が終わった日の夜。まだセックスという行為すら知らなかったあたしは、父に無理やり犯された。

血を流し、泣きながら痛いと懇願するあたしに構わず、父は乱暴に腰を振り続けた。行為を終えた父は泣きながらあたしに謝った。何度も何度も、あたしを抱きしめて謝った。

今にして思えば、父は壊れてしまっていたのだろう。

誰よりも母を愛していた。

そして、人一倍やさしい人だった。

だから心が壊れてしまったのだろう。

母の居なくなった世界で、唯一、死んだ母の面影が残るあたしにすぎたのだろう。

母の死因は通り魔による殺害だった。何の背後関係もない金品目当ての行きずりによる犯行。それだけに犯人の特定も出来ず、ろくな捜査もされずに事件は風化していった。

日を追うごとに母に似ていくあたしに対する父の暴行は、性的なものだけでなく、暴力を伴うようになった。殴られ、蹴られ、首を絞められることもあった。

その度に父は泣きながらあたしに謝った。

あたしを抱きしめて、頭を撫でてくれた。

だからあたしは父を憎めなかった。何度も乱暴をされても、最後にはやさしく抱きしめてくれるのが嬉しかった。

母を失った悲しみをあたしにぶつけることで父は心の安定を保っていた。

なら、あたしはどうすればいい？

どうやって自分を守ればいい？

ねえ、教えてよ。

第八話 デストラクター

シャワーの水滴が娘の身体を伝って落ちていく——

女性だけが持つ緩やかな曲線は艶めかしくも美しい、一種の芸術品の様ですらあった。肌の色は白く、長い腕と脚は病的なまでに痩せている。腰も同じく細い。それでいて胸はまったく痩せていない。むしろ豊満と呼ぶべきだろう。両腕を少し寄せただけで、谷間が出来る。

「……………」

だが、娘はそれが嫌だった。胸が大きいと服が自由に選べなくなる。彼女の正装であるゴシックロリータ等が顕著だ。

憂鬱な気分で、ふと目の前の鏡に映った自分の姿を見る。

そこに映っているのは二十代前半くらいの若い娘だ。水に濡れた長い黒髪は長さがあちこちで違っている。これは彼女が自分で切っているためだ。見ず知らずの他人に髪を触られる事を思うと鳥肌が立つ。瞳の色は黒。普段は眼帯で隠している右目は閉じている。視線を下にずらせば、左手首には何条ものリストカットの痕が見える。

美人だ。

これらの『特徴』に目をつぶれば、美しい娘と言える。

だが、彼女の美貌を気付かせ難くしている要因がもうひとつある——表情だ。

無表情ならまだいい。しかし娘の隻眼は、どこか遠くを見つめている様に焦点が合っていない。

「……………」

その視線は虚ろで、空虚で、見る者を不安にさせる。

カグヤ・イザヨイ。

それが彼女の名前だ。

コール・サインは『デストラクター』。

カグヤの特性を知っている者はこうも呼ぶ。

〈魔女〉——と。



がらんとした格納庫に一体の戦闘機械獣——ゾイドが鎮座していた。

ゾイド——それは惑星Ziに生息する金属生命体の総称である。ゾイドは自ら戦う意思を持ち、ヒトを操縦席に乗せる事で戦うための兵器となる。

だが、種類や個体によっては搭乗者を選んだり、戦う事を拒否するものも居る。ヒトと同じだ。気に入らない相手とは組みたくないし、戦う事に対して臆病な性格の個体も稀に存在する。

それが、この〈ライガーゼロ〉と呼ばれる個体だ。

〈ライガーゼロ〉。

全高約八メートルのライオン型ゾイドである。『素体』と呼ばれる黒い機体に白い装甲。目立った武装は無い。どこまでもシンプルで、生まれたままの姿に近い。

ヒトの保護下で生まれ育ったものでなく、完全な野生体をベースに開発されたゾイド——それが〈ライガーゼロ〉である。

野生体ならではの荒々しい生命力にあふれる機体。

そのはずだった。

だが——

「どういう事なのかねえ」

手元のコンピュータ端末を操作しながら、男はぼやいた。

見た目通りならどこにでも居そうな四十代くらいの中年だ。ぼさぼの髪には白髪がいくつも見える。服装はよれよれの白衣——彼はゾイド専門の技術者である。性格も『研究以外興味が無い』と周囲からは思われているし、本人も否定はしていない。

年齢不詳。経歴も不詳。本名も不詳。

周囲からはただ〈教授〉と呼ばれている。

ちなみにZOITEC不正規技術開発部門——通称〈フアントム〉の最高責任者でもある。

彼が今、取り組んでいるのは発見されたばかりの〈ライガーゼロ〉だった。すでに絶滅したであろうと思われていたそのゾイドは、偶然発見された海底洞窟の中で、ゾイドコアが休眠状態で保存されていた。しかも『シュナイダー』『イエーガー』『パンツァー』と呼ばれる三つのチェンジング・アーチャー・システムも同様に保管されていた。

言わば宝の山だ。

これを見つけた〈ZOITEC〉社は情報漏洩を防ぐため緘口令を敷き、〈フアントム〉に技術解析を一任した。

「ゾイドコアの起動は完了。コンバット・システムも問題なし」

〈教授〉がぼやいているのは、件の〈ライガーゼロ〉の事だ。前言通り休眠状態だったゾイドコアの再起動は完了し、コンバット・システムを始めとする微調整も問題なく終わった。だが、ゾイドコアの出力が安定しない。まるで怯える様に不安定なのだ。

「となると、やはり問題はパイロットか……」

面白そうに——実に楽しそうに〈教授〉は言った。

判らない事は説明したい。

それが技術者という人種の正しい在り方だと彼は認識している。特にゾイドという存在は面白い。古いにしえからヒトとゾイドは共生してきた。にも拘らず、未だにゾイドの謎は多い。だから彼はゾイド専門の技術者となった。〈ライガーゼロ〉などという稀少な機体の解析を命じられた時には、嬉しさのあまり失神しそうになった程だ。

彼はゾイドを愛している。

だがゾイドは彼を愛してくれない。

そこがまた面白いと思う。

〈教授〉という男は、つまりそういう人物だ。



シャワーを終えたカグヤは髪を乾かし、すでに普段着と化しているゴシックローリータお身に纏まとう。フリルとレースをあしらった、黒と白のコントラスト。少女性を含みながら、どこか退廃的な意匠は、ある種のファッションの極致だと思わせる。身支度を整えるとカグヤはぼーっと天井を見つめた。

「……………」

静かだ。

普段はうつつうしいくらいに付きまどってくる少女が居ない。

紅あかい髪と瞳の少女——フィア。

彼女は自身の定期検査と、〈シラヒメ〉の換装作業に立ち会うために別の場所に行っている。だからカグヤはひとりだ。

「……………」

なんだろう、この感覚は？

心にぼつかりと穴が空いている様な不思議な感覚。

フィアと出逢であって、パートナーになって、まだそんなに経っていない。にもかかわら

ず、フィーアはすっかりカグヤに懐いてしまった。
自分もまたそうなのだろうか？

フィーアと居るのが当たり前で、彼女が居ないと物足りないと感じているのだろうか？
それは寂しいという感覚。フィーアと出逢うまで忘れていた感情だった。

そこへ――

――ピピッ！

短い電子音がカグヤの耳朶を打った。

〈教授〉からの呼び出しだ。

カグヤは内線に通じている電話の受話器を取って短く応対すると、すぐに受話器を戻して部屋を出た。



呼び出しに応じたカグヤを待っていたのは一体のゾイドだった。〈教授〉の説明によると、恐らく現存している最後の機体だそうだと。

〈ライガーゼロ〉。

戦局に応じて装備を変更する事を前提に開発された、ある意味で万能と呼べるゾイド。〈フアントム〉に回ってくるゾイドは特殊なものばかりだ。試作機、試験機、あるいは公には出来ない類の技術を積んだ実験機。

ゾイドの性格もそれぞれで、おとなしいものも居れば、凶暴なものも居る。

カグヤはそれら様々なゾイドに乗ってきた。そして、その全てを完璧に乗りこなして見せた。

それは本来あり得ない事だった。

ゾイドと搭乗者には相性があるからだ。だがカグヤに限って言えば、これが当てはまらない。どんなゾイドであっても、カグヤが乗ると従順になり、彼女の期待に応えようと凶暴化する。

故に彼女はこう呼ばれる。

『ゾイドを惑わす魔性の女』――〈魔女〉と。

それは完全野生体をベースとした〈ライガーゼロ〉であっても例外ではなかった。

「〈ライガーゼロ〉のゾイドコア出力、安定域に入ります。なおも活性化」

「計測機に異常は認められず。計測を続けます」
「パイロットのバイタルにも問題は見られません」
オペレーター達の報告を聞きつつ、「教授」は自らも送られてくるデータの解析に余念がなかった。

やはりカグヤの性質は特別だ。何がゾイドをそうさせるのかは不明だが、カグヤの搭乗したゾイドが異常に活性化——凶暴化するのには間違いない。それでいてカグヤの命令には逆らわない。まったくもって不思議だ。

「彼女はまるですべてのゾイドに愛されている——と言った感じですね」
何気なく呟いたのであろうオペレーターの言葉に、「教授」は果たしてそんな事があり得るだろうかと黙考した。



〈感応者〉。

それはゾイドに対して特殊な影響力を持つ者達の総称だ。例えばゾイドの感情や意思を『言語』として理解出来たり、ある種的能力を強化する事が出来る。今でこそ特殊な能力だが、昔は——まだゾイドが戦闘機械獣となる前は、誰もが当たり前に持っていたとも考えられている。

だがカグヤにはゾイドの気持ちは判らない。何故、自分が搭乗したゾイドが凶暴化するのか判らなかつた。彼女はただ純粋に願うだけだ。

——壊したい。

——すべて壊れてしまえばいい。

——この世界の何もかも。

そう願うだけでゾイドが凶暴化する。そのゾイドコアが活性化する。

「……………」

コクピットに座ると落ち着く。絶対的な力が自分を護ってくれている様な気持ちになる。

『鋼鉄の子宮』——まるで母親の胎内に居るかの様な錯覚を覚える。

だがそれだけでは満たされない。

心の安寧を得たなら、次は身体で感じたい。

だから——

「…………インストレーション・システム・コール——シユナイダー」

『お前さんならそう言うと思ったよ』

カグヤが搭乗している〈ライガーゼロ〉のコクピット。そのモニターに〈教授〉の映像が小窓表示された。

『シュナイダーに換装する。換装システム始動、CASはシュナイダーだ』

〈教授〉の宣言に続く様にオペレーター達が換装シークエンスを開始する。

『了解。換装システム始動。CASはシュナイダー』

『換装アーム展開。タイプ・ゼロからシュナイダーへ』

『システムに問題無し。換装率七〇パーセント』

カグヤが外に目を向けると、〈ライガーゼロ〉を挟み込む様にしている両側の壁から何本もの作業アームが展開し、次々に装備が換装されていく。

CAS——チェンジング・アーマー・システムとは、名前の通り武装を変更する機構だ。〈ライガーゼロ〉のそれは戦局に応じて全身の装備を変更するという発想で開発された。

高速戦用の『イエーガー』。

格闘戦用の『シュナイダー』。

砲撃戦用の『パンツァー』。

これらに基本形態である『タイプ・ゼロ』を加え、〈ライガーゼロ〉はあらゆる戦況に対応が可能となった。

だがベースとなる完全野生体の確保の難しさに加え、一体あたりの製造コストが〈ブレードライガー〉の三倍以上という量産性の低い機体でもあった。

もつとも、そんな事はカグヤの知るところでは無かったが。

「……〈ライガーゼロ シュナイダー〉——CAS、換装完了」

やがて作業アームがタイプ・ゼロのアーマーを収納し、換装作業が完了した。時間にして一分とかかかっていない。

『よし、良いタイムだ。機体に問題は無いか？』

「……ええ、問題無い」

〈教授〉の問いにカグヤは短くそう応えた。

『ならさつそくテスト開始だ。ターゲットは無入浮遊砲台二〇機だ。弾は模擬弾だが、当たればそれなりに衝撃があるから注意しろよ』

「……了解」

やはり短く返答してカグヤは〈ライガーゼロ シュナイダー〉を格納庫から出撃させた。その身に纏うのは、橙色のアーマーに変化している。特徴は七本のレーザー・ブレードと五基のEシールド・ジュネレーターだ。絶大な攻撃力と防御力を備え、増えた重量は全

身のスラストで補^{おぎな}う。膨大なエネルギーを消費するため稼働時間は短い上、飛び道具は無し。ただひたすら敵に接近し、短時間で戦闘を終わらせる必要がある。

非常に極端な装備だが、これはイエーガーやパンツァーにも言える事である。長時間の高速戦闘は搭乗者の身体^{からだ}に負担がかかるし、残弾が無くなれば補給に戻らねばならない。どのCASにも一長一短がある。

カグヤが最初にシュナイダーを選択したのは単に彼女の嗜好^{しこう}によるものだ。レーザー・ブレードで敵を切断する——それはもとも判りやすい『破壊』行為だから。

〈ライガーゼロ シュナイダー〉がドローンを補足する。それは簡易型マグネッサー・システムを積んだ浮遊移動砲台だ。無秩序^{ランダム}に移動し、射程圏内に入った敵を砲撃する無人機。サイズはSSゾイドと同程度で、運動性は低い。

カグヤの〈ライガーゼロ シュナイダー〉がドローンの一機^{ひと}に跳びかかる。頭部にある五本の小型レーザー・ブレードを展開し、それを両断する。

——まず一機。

次は両腰に装備された大型レーザー・ブレードだ。長大なそれが振り回される度に一機、また一機と浮遊しているドローンが切断されて墜^おちていく。

これだ。この感覚こそカグヤが待ち焦^こがれていたものだ。破壊する。ただ破壊する。

その時だけ空っぽな自分が満たされる。嫌な事は考えなくていい。

それは悦^{えつらく}楽。

何事にも代えられない究極の快樂。

「……………はあ——」

切なげな吐息^{といき}がカグヤの口から漏れる。その表情は倒錯^{とうさく}的で、喘^{あえ}ぐ様な声は官能的だ。実際、カグヤの感じている興奮は性行為のそれに近い。気分は高揚^{こうよう}し、身体^{からだ}の芯が熱くなる。今にも絶頂に達してしまいそうな快樂を感じながら敵を撃墜していく。

残りドローン数——一。

そのタイミングでコクピットの表示^{ディスプレイ}卓に文字が表示された。

〈BUSTER-SLASH stand by ready〉

カグヤはそれを確認すると、

「……………バスター・スラッシュ——」

と、恍惚^{こうつう}とした声音^{こゝろね}でディスプレイの表示を読み上げた。

——あとどれだけ生きればいい？

——あとどれだけ壊せばいい？

——あととどれだけ……。

いや、彼女は知っている。

どれだけ生きても何も変わらない。

どれだけ壊しても満たされない。

どれだけ。どれだけ。どれだけ……。

だったら——

「……………この世界ごと消えてしまえばいい——」

だからカグヤは^{デストラクター}破壊者。

彼女の想いが——世界を壊す。

第九話

『信じるものは救われる』——それはある意味正しい。

人間は信じるに足るなにか、心の拠り所^よなしでは生きていけない。それはヒトによって家族であったり友人であったり恋人であったりする。無論、趣味や仕事でもいい。生きる目的に値するなにか。

しかし、現実にごういった拠り所を見出せない人間もいる。そういった人間が『神』に縋^{すが}る。

神。

それは唯一にして無二の絶対存在。超常的な力を持ち、被造物^{ひぞうぶつ}たる人間を見守る、姿なき偶像。

絶望は死に到る病だ。だからヒトは希望を求める。

神とはすなわち、ヒトが生み出した希望の象徴だ。

そして、希望たる神を信じる事で心の拠り所を得る。

だから信じられるものを得た時点で、そのヒトは救われている。

信仰とはつまりそういう事だ——少なくとも自分はそう認識している。

神が実在するかなど問題ではない。

信じる事に意味があるのだから。

第九話 聖女と魔女（前編）

休日を目前に控えた週末の夕暮れ時。

本来であれば、明日からの休日に備えて買い物をする者や開放感に浮かれる学生、これから夜の街に繰り出す若者で賑わっているはずの大通りが、この日は別の喧騒けんそうに包まれていた。

耳をつんざく轟音。瓦解がかいする建物。逃げ惑う人々……。

日常が崩壊する街の一面に、非日常の象徴たる二つの異形が対峙していた——ゾイドだ。

ひとつは〈ゴドス〉。

かつてのヘリック共和国軍機甲師団・強襲戦闘隊を担った主力ゾイドであり、その戦闘力は『小型ゴジュラス』と呼ぶにふさわしいものだ。恐竜型に分類されるそのシルエットは二本足で直立し、長い尻尾は格闘戦以外にもバランスサーとして機能する。

カラーリングはZAC2099年モデルに準拠したシルバーとグレーのツートンカラーだが、武装は一新され、各部もチューンされている。いわゆる強化型だ。

コクピットは複座式ふくざしきに改装され、前部のメイン・シートと、後部のサブ・シートというレイアウト配置レイアウトとなっている。

「民間人の避難状況はどうなっていますの？」

強化型〈ゴドス〉のメイン・シートに座る娘が、正面に対峙するもう一機のゾイドに視線を定めたまま問う。その声には緊張感はあるが、焦りや恐怖は感じられない。

年齢は二十代半ば。金髪碧眼へきがんに整った容姿。高貴さを感じさせる美しい娘だ。

「B班の誘導アビデが滞おつてます。しばらく目標の動きを止める必要があります」

金髪の娘に応えたのは、サブ・シートに座り、各種情報解析を担当している少女だ。こちらはおよそ十七、八歳。くすんだ赤毛に黄色の瞳。万人受けする美人ではないが、勝気そうな表情には愛嬌あいせうがあり、ソバカスがチャーム・ポイントと言える少女だ。

娘と少女は共に修道服に身を包んでおり、軍人や傭兵といった雰囲気はない。

「了解ですわ。マシン・キャノンを排除バインジ。格闘戦で行きますわよ——ミゼット」

「はい、マヘリアお姉さま。いつでもどうぞー！」

強化型〈ゴドス〉の左脇わきに装備されたマシン・キャノンが切り離され、地上に落下し、

石畳の道が陥没する。重量が軽減された機体が姿勢を低くし、仕掛ける体勢に移行する。「相手は〈レブラプター〉。運動性は脅威ですが、取り付けばパワーで圧倒できます」

「この子が小型ゾイド相手に遅れをとるなんてありませんわ——でしよう？」

「当然です。私とお姉さまが乗っているんですから」

余裕に満ちた口調で問う娘に、少女は表情を輝かせて応えた。

「さあ、行きますわよ——〈ビアトリス〉」

娘の呼びかけに応えるように咆哮を上げると、〈ビアトリス〉と呼ばれたゾイドは突進した。

〈ビアトリス〉。

それがこの複座型のコクピットを持つ強化型〈ゴドス〉の愛称だ。

その最大の特徴は右腕部に装備された、自身の全高すら凌駕する巨大な杭打ち器——

〈セイクリッド・ランサー〉の存在だろう。並みの〈ゴドス〉であれば歩行すらままならない代物だが、この〈ビアトリス〉は、それを自由自在に振り回してなお余りある出力を有している。

ショルダー・タックルの要領で左肩から体当たりをして敵機を怯ませると、〈ビアトリス〉は両腕で相手の肩を固定、〈ゴドス〉の強力な武器であるキックが追い打ちをかける。

腹部にモロに衝撃を受けた〈レブラプター〉は堪らず苦悶の声を上げた。

〈レブラプター〉はガイロス帝国によって開発された、〈オーガノイド・システム〉を限定的に搭載されたベロキラプトル型ゾイドだ。常識を超えた俊敏性と生命力を得た本機は格闘戦に特化し、同時期に開発された共和国製ベロキラプトル型ゾイド〈ガンスナイパー〉が射撃戦に特化された事としばしば比較され、両国のゾイドに対する運用・設計思想の違いを見ることが出来る。

しかし、現在では〈オーガノイド・システム〉に関する技術は失われており、現存する〈レブラプター〉に同システムは搭載されていない。

つまり、本機の最大の優位性が失われているに等しい。

「ミゼット、コクピットに生体反応は？」
「確認出来ません。やはり今回も……」

油断なく敵機の挙動を窺いつつ訊ねる娘に、少女は思っ処があるのか、続く言葉を濁した。

そこへ——

『——ハウンド・リーダーよりアフロディーテ。周辺の避難は完了、仕上げを頼む』
通信機越しの男の声が〈ビアトリス〉のコクピットに響く。

「アフロディーテ、了解——お姉さま！」

「よくってよ。さてその命、神に返して頂こうかしら？」

「……お姉さま、ギリギリです」

娘の楽しい発言に、少女は辟易した様^{へきえき}に突っ込みを入れた。

だが、娘は少女の言葉に気を悪くした様子も見せず——

「ミゼット、人生に必要なのは余裕とユーモアでしてよ？」

「TPOによります。もう照準固定、完了してます。〈セイクリッド・ランサー〉スタン

バイOKです！」

「仕方ありませんわね——」

戦場において緊張感の欠片もないやり取りを交わす二人のシスター。少女の意見に納得したのか、娘は操縦桿を引き、〈レブラプター〉と組み合っていた愛機を後退させる。

後方に跳躍し、敵機と距離を取った〈ビアトリス〉は、着地と同時に右腕に装着した巨大な杭打ち機を構えて再度突進する。

「〈汝の魂に安寧を〉——」

娘の激発音声により、〈セイクリッド・ランサー〉の安全装置が解除される。

既に娘の表情には、先程までの緩んだ微笑は浮かんでいない。

〈ビアトリス〉は敵機に肉迫すると〈セイクリッド・ランサー〉の切っ先を突き出す。先端部の捕獲用クローが展開し、〈レブラプター〉の胸部を強引に掴む。

突進の勢いはそのまま、敵機を宙に浮かせたまま〈ビアトリス〉はヒトの往来の絶えた大通りを突っ切り、街の最端部である外壁に迫る。

この街——ミヤコ・シテイは周囲をぐるりと壁で覆われている。本来は侵入者を阻むための壁が、今回は外に逃がさないための檻として機能した。

外壁を間近にしても〈ビアトリス〉の疾走は変わらない——そのまま〈レブラプター〉を外壁に叩きつける算段だ。

状況を認識したのか、生物としての本能か——悲鳴を上げ、脱出しようともがくものの、抵抗むなしく〈レブラプター〉は背中から外壁に激突した。

さらに——

「——インパクト」

呟きと共に娘が操縦桿の引き金のひとつを引くと、〈セイクリッド・ランサー〉の薬室内部で炸薬が爆発を起し、排出口から空薬莖が排出。同時に爆発で押し出された銃が、高速で出口を求め駆け抜けた。

打ち出された銃は出口を塞いでいた哀れなふたを貫通し、外壁の半ばまで到達した。

壁に縫い付けられる形で力なく手足を垂らした〈レブラプター〉の姿は、はりつけ 磔はりつけにされた罪人の姿を思わせる……。

「コンバット・システムの破壊を確認。〈レブラプター〉も完全に機能を停止——状況終了です、お姉さま」

「そう。お疲れさま、〈ビアトリス〉」

娘のねぎら 労いの言葉に応えてか、右腕部の得物えものを引き抜き、強化型〈ゴドス〉は戦闘態勢を解いた。

支えを失った〈レブラプター〉は外壁から剥はがれ落ち、力なく地面にその身を横たえた。動き出す様子は見られない。

それを確認すると、パイロットが降りやすいよう降こうちやく着姿勢とを採った〈ビアトリス〉の風防窓キャンビが開かれ、修道服姿の二人が危あやなげない身のこなしで地面に降り立った。



〈エイミス教団〉——通称〈教団〉。

現時点における惑星Z-1最後の戦争、いわゆる〈大戦〉の終結から約半世紀……。

世界は概おおよね平和だった。

〈大戦〉終結間もない世界に突とつじよ如現れた〈教団〉は、そのシンプルな教義と間口の広さから、不安を抱える民衆に瞬とく間に受け入れられた。

なにより、〈教団〉は豊富な資本力と独自の戦力を保有していた。人はパンのみに生きるに非あらず——しかし、所詮しよせんパン無しでは生きられない。戦う力が無ければ生き延びられない。

〈教団〉が受け入れられ、惑星Z-1の最大勢力となったのは当然の結果とも言えた。

「——どうですか？」

修道服姿の娘が、回収された〈レブラプター〉の頭部に張り付いている作業着の男に声をかけた。

場所は〈教団〉ミヤコノ・シテイ支部の地下にある整備工場。油や金属の臭いが立ち込める、お世辞にも清潔とは言えない場所には不似合いな美しい娘だ。

彼女の名前はマヘリア・メルル。

セミロングの髪は艶つややかな黄金色。瞳は宝石を思わせる碧眼へきがん。整ったその容貌は、物語にしか存在しない『貴族の令嬢』を思わせる優美さがある。

「ハッチ、強制開放します」

ようやくとといった様子で男が言うと、〈レブラプター〉の頭部上半分が口を開ける様に開き、コクピットが露あらわとなった。

「上出来ですわ。お疲れさま」

マヘリアから労ねぎらいの言葉を受け取った男は、一礼するとその場を離れた。

「ではミゼット、お願いしますわ」

「はい。お姉さま」

マヘリアが品の良い笑顔で声をかけると、彼女の傍かたわらに居た少女が応えた。

癖の強いくすんだ赤毛は短めに切り揃えられ、その下にはやや大きめの黄色の瞳。肌は褐色で、鼻先には薄っすらとソバカスが見られる。万人受けする美人ではないが、それなりに可愛らしい顔立ちをしており、気の強そうな表情と相まって、愛嬌のある印象を与える少女だ。年齢は十七、八歳といった処とこだろう。

少女の名前はミゼット・レミントン。

マヘリアを『お姉さま』と呼んでいるが、姓ファミリーネーム名カネの違いからも判る様に、マヘリアとミゼットは実の姉妹ではない。彼女達は〈代行者〉と呼ばれる〈教団〉のシスターであり、ここでは先輩のシスターが後輩のシスターとペアを組んで指導する制度があり、二人はそのペアなのである。

余談だが——俗ぞくに『姉妹制度』とも呼ばれるため、先輩を『姉』、後輩を『妹』と位置付けるのはシスターの伝統となっている。

それはさておき——

現在、彼女達が相対しているのは、昨日の戦闘で自ら捕獲した〈レブラプター〉だ。腹部に〈セイクリッド・ランサー〉による貫通痕くわんつんがある以外は目立った損傷は無い。最低限の攻撃で相手を無力化すべく戦った結果だ。

だが、仔細しさいに観察すればこの〈レブラプター〉のあちこちに傷がある事が確認出来できる。昨日今日出来た傷ではない、長い間ロクな整備を受けていないのは明らかだ。

ミゼットがマヘリアに先行してコクピットに乗り込むと、操作卓コンソールを操作し、システムを立ち上げていく。

その姿を見守るマヘリアはどこか物悲しく見える。

「ダメですね。システムの半分以上が死んでます。機体を含め、長い事まともな整備を受けていません」

妹の言葉に我に帰ると、何事も無かった様にマヘリアも操作卓コンソールを覗き込んだ。

何故なぜそんな状態であるにもかかわらず街中で暴れたのか——マヘリアには見当が付いて

いた。

「やはり……」

「つがや 咄く姉の視線を追ってミゼットが顔を上げた。

上方、開かれたハッチの内側——そこには赤い塗料でペンキ殴り書きされた文字が見えた。

『あるべき世界のため、ここ此処に鉄鎚を下す』

「……これで四件目ですね——〈イクスクルーダー〉のテロ」

視線を操作卓コンソールに戻し、情報を読み取る作業に戻ったミゼットが咄いた。

〈イクスクルーダー〉。

ここ最近、ミヤコノ・シティを騒がせているテログループの名だ。

その手口は時限式で起動するようプログラムされたゾイドを搭載したコンテナ車を街中等に放置し、無人操作で暴れさせるといふものだ。コンテナに格納出来る大きさのゾイドとはいえ、人間にとつてその脅威は車や重機の比ではない。

更にウイルスで凶暴化したゾイドは、破壊衝動のみで暴れ続ける。瞬間的に破壊を撒き散らす爆弾と違い、被害は時間経過と共に拡大していく。この惑星Zーズイーにおいて、破壊だけを目的とするなら、これ以上手軽で効果的な手段はないだろう。

この〈レブラプター〉がそうだ。

恐らくは放棄されたか、野良化したものを捕獲し、最低限の整備をしただけなのだろう。

「……………」

そう思うと、マヘリアは堪たまらない気持ちになってくる。

「——どうしてヒトは……」
あとは言葉にならなかつた。言葉にしてしまえば本当にどうしようもなくなるのが判っているから。

そんな姉の姿を見るとミゼットもまた堪たまらない気持ちになる。彼女の場合は爆弾代わりなせにされたゾイドに対する同情より、マヘリアを悲しませる要因に対する怒りの方が強い。

マヘリアは優しい。その慈愛の精神は誰であつても分け隔へだてなく、〈教団〉の信者だけでなく、同僚のシスターからも人気がある。

ミゼットもそんな彼女に憧れていた。

だから、自分が妹に撰なせばれた時は信じられなかつた。

何故、自分が選なせばれたのか判らなかつた。

理由は未だに判らない。

だが、判った事もある。それはマヘリアの優しさが本物で、それだけに精神的に傷付きやすいという事。

盲目的に性善説を信じている訳ではない。だが、それでも最後の一线でヒトの良心を信じている。

だから、マヘリアは人間の悪意に敏感に反応してしまう。

表には出さないが、ミゼットはその事を知っている。

だから――

「お姉さま！ データの吸い出しは終わりました。今日はここまでにして、もう休ませよう！」

努めて明るい雰囲気でミゼットが言う。

「明日は日曜日ですよ。礼拝に備えて、早く寝ちゃいましょう！」

「……ミゼット」

憂いを含んでいたマヘリアの表情が緩む。

妹の気遣いが嬉しかった。本当に彼女のこういう処ところに救われていると今更ながら思う。

「そうね。そうしましょうか」

「はい！」

マヘリアがそつとミゼットの頭に手を載せる。

「お、お姉さま……？」

突然の姉の行為に驚くミゼット。勿論、嫌な訳ではないが、この状況に彼女の状況処理能力が追いつかない。

「ありがとう――ミゼット。貴女が妹で良かった」

「あ――あの……い、いえ……」

それだけしか言葉に出来なかった。

それでも、姉の役には立てたのだと実感出来た。

それだけでミゼットは満足だった。

他に何が出る訳でもない。

だから今は自分に出来る事をしよう。

姉の支えで居られるなら、妹として必要とされているなら、望まれる限り彼女の側に居よう。



時刻は日曜の正午前。

休日であればまだ寝ていても許される時間だ。

そんな時間に起床し、二度寝する気も起きず、アサト・タチバナはぼんやりとした表情でリビングに顔を見せた。

年齢は二十代前半だろう。黒髪黒瞳。体格はやや痩せており、身長は百七十センチ前後。気怠る（けたる）ように見えるのは寝起きのせいではなく、彼の場合は終始このありさまだ。

普段であれば昼過ぎまで寝ているのが常のアサトが、こんな時間に起きてきた——そんな、それだけの状況にハルカ・クスノセは妙な違和感を感じた。

「……………」

「……………」

互いに言葉が出ない。

妙な沈黙が漂う。

先に動きを見せたのはアサトだった。伸ばし気味の黒い髪を掻きながら、眠たげな顔を、やや不自然にハルカから逸らした。

「どうかしましたか？」

ハルカが小首を傾げた。

二十代も半ばの娘の仕草にしては幼いが、そう感じさせない、のんびりとした雰囲気。彼女にはある。長く艶やかな黒髪。瞳も黒く、どこかところんとした印象がある。

和風美人——一言で言えばそんな形容詞が似合う娘だ。

「いや、別に……。よく判らんが、何故かお前と顔を会わせ辛い」

明後日の方向を向き、自分でも何を言っているのか判らない様な様子でアサトは応えた。

「はあ……。あ、判りましたよ」

「んふふー」と悪戯っぽい笑みを浮かべて、ハルカがアサトに言った。

「えつちな夢でも観て、その相手がわたしだった——とかですか？」

「……………」

冗談（ジョーク）で返すか、受け流すべきだっただろう。実際、ハルカがこういった類（たぐい）の発言をするのは珍しい事ではないし、アサトも対応には慣れていた。

だが、もしかしたらそうなのではないか？——という疑問が浮かび、即座に対応が出来なかった。

「…………え？ ひよつとしてそうなんですか……？ やだ、どうしましょう。いえ、嫌とかではないんですよ？ けど、そうならそう言ってくれば何時（いつ）でも——つて、何言ってるんでしよう、わたし……あ、でも——」

頬など赤く染め、それを両手で覆いながらあれこれと続けるハルカ。
アサトがうんざりしていると——ふと視線を感じた。

あまりに存在感を主張しないため、そこに居るのに気付かなかったが——もうひとり少女が居た。

少女の名前はカスミ・シノザキ。

肩口で切り揃えられた灰色がかった銀髪と、同じく灰色がかった黒い瞳。肌は抜ける様に白い。

恐ろしく整った容姿は、いつそ美少女と呼んでも差し支えない。色素が薄いイメージも、少女の儚さと脆さを演出するのに一役買っている。

だが、その顔には表情というものがなく、惻然な無表情だけが浮かんでいる。人形の様な——という表現がそのまま当てはまる小柄な少女だ。

実際、フリルの付いた洋服でも着せて座らせて置けば、人形と見分けが付かないだろう。

アサトとカスミの視線が合う。

これまでの会話は聞いていただろう。年頃の少女のこういった話題に見せる反応は大きく二種類ある。興味津々か、抵抗感を示すかだ。

カスミの場合は後者だったらしい。

アサトに向けられる絶対零度の視線は多分に軽蔑的なニュアンスが込められている。

「……何か？」

大きくは無いが、よく通る澄んだ声が少女の口から紡がれた。

「あ——……別に」

「そうですか」

短く言うと、カスミはもう興味を失せた様に手元の文庫本に視線を戻した。どうやら読書中だったらしい。

「……ダメ人間」という呟きは聞こえなかった事にする。

視線を前方に戻すと、そこではまだ、もじもじしながら身悶えしているハルカが居た。暫くは何を言っても無駄だろう。

ふと天井を見上げる。

無論、そこにこの状況の対処法が書かれている筈も無く、アサトはただ嘆息した。

時は折りしも日曜日。

〈クスノセ機獣派遣事務所〉は今日も概ね——平和だった。



十人掛けの椅子いすが二列、縦にずらつと並んでいる。部屋の照明は最低限で薄暗く、ステンドグラスから差し込む日差しひざしの暖かな色彩を際立たせる。

おしそ 廠おしそかな雰囲気の教会は大勢の市民と十数人のシスターで溢れていた。一段高い演壇エンタナにいるのは神父だろう。

週に一度の礼拝の日。それが今日だ。

そんな神秘的とも言える光景の中に、ひとり場違いなものを感じている娘がいた。

ひたすら黒い。まるで肌を晒さらす事を憎んでいるかの様な、徹底した格ファッション好は、娘を周囲から明らかに浮かせていた。

黒いスラックス。腰にはスカートを思わせる黒い腰巻バレオを巻いている。

上半身も同じく黒で統一されており、長袖のシャツは指先がようやく出るゆつたりとしたもので、その上に羽織っているジャケットの様な上着も黒い。肩はドレスの様に膨らんでおり、袖口は手首から先が大きく広がっている。

何層にも重ねられた生地きじと、白のレースという構成からはゴシックロリータを思わせる。だが娘の容姿に少女性は感じられない。

年齢は二十代前半だろうか、病的とも言える肌の白さと虚ろな表情。黒い髪は適当に切った様に不揃いで、あちこちで長さが違っている。右目は眼帯で覆われていて見えないが、左目の瞳は黒い。その退廃的な雰囲気は、喪服を着た葬式の参列者の様にも見える。

「……………」

パイプオルガンを伴奏にした賛美歌がゆつたりと流れているのをぼんやりと聴きながら、娘は追憶おぼえに耽ひたっていた。

昔は——まだ両親が健在だった頃はこうして日曜には教会に礼拝に行っていた。

特に敬虔けいけんな信徒だった訳ではなかったが、小さな街だったので、特に事情がある訳でも無ければ、日曜は教会に行くのが一般的だった。

同じ様に学校のクラスメイトも来ていた。学校の外で友達と会うのは新鮮で、娘は礼拝自体は嫌ではなかったし、帰りに家族で食事するのが定例となっていた事もあり、どちらかと言えば週に一度のこの行事イベントは好きだった。

あの頃は娘の世界は幸せだった。

そんな事実が当たり前すぎて実感できない程度には、毎日が幸福だったと様に思える。

賛美歌はまだ続いていた。

神を賛美し、信仰を励はげます歌——聖歌。

曰く、この世界は幸福と慈愛で満ちているらしい。

「……………」

何故だろう。ひどく苛立つ。

この世界は本当に素晴らしいのか？

この世界はそんなに愛すべきものか？

この世界はそれ程に美しいと言っのか？

胸が締め付けられる様な気がした。

まるで自分の周囲だけ空気が無くなってしまった様な息苦しさを感じる。

ヒトが多い場所は苦手だ。

否でも自分が独りだと思ひ知らされるから——

「——どうかされましたか？」

突然、声をかけられて意識が現実に戻った。

声のした方に目を向けると、金髪碧眼（きみがん）のシスターが気遣わしげな表情を浮かべていた。

年齢は娘より少し上だろうか。二十代半ば位（くわい）に見える。

言ってしまうば美人だ。

碧色（あお）の瞳がこちらをじっと見つめていた。

「大丈夫ですか？ お悩みが深い様にお見受けしますが——よろしければお話をお聞き致しますわ」

「……………」

そんなに思い詰めた顔をしていただけだろうかと暫く考えたが、身に覚えが無い。そんな感情はとつくに無くしたと思っていた。

気付けば賛美歌は終わっており、周囲は多くの人間の話し声で賑わっていた。いつの間にか礼拝の儀式は全て終わっていたらしい。

それだけ深く考え込んでいたのかもしれない。

「……あたしは〈教団〉の信徒じゃない」

その通りだ。ただ待ち合わせにこの場所を指定されただけ。

だから娘はそう答えたのだが——

「それは問題ではありませんわ。教会の敷居を跨いだのであれば、貴女にはその権利があります——いえ、本当はこの世界の全ての人に幸せになる権利があるのですから」

慈愛に満ちた微笑を浮かべ、シスターはそんな事を大真面目に言った。

〈聖女エイミス〉が実在するなら、彼女の様な人物だったのではないか——そんな事さえ思わせる表情だった。

もつとも、偶像を崇拝する宗教において、それに形を与える事は背徳行為だろうが。

何か判然としない苛立ちを感じ、思い付いた事を訊いてみた。

「……あなた、どうして生きてるの？」

「え？」

シスターが呆気に取られた様に言葉を失った。

「……生きるってそんなに素晴らしい事？ あたしには、よく判らない」

「先程の賛美歌の事ですか？」

娘の言葉の意味に思い当たった様にシスターが言った。

「歌詞に意味などありませんわ。よくある常套句の羅列……綺麗事です」

「……………」

意外だった。

およそ〈教団〉のシスターの口から出る言葉ではない。

「貴女は神を信じますか？ 少なくとも、わたくしは信じていません。居もしない偶像にすがるより、こうして触れ合える方が安心できますから」

そう言うとシスターは娘の手をとって、自分の両手で包み込む様にした。

その姿は神に祈りを捧げる敬虔な信徒そのものと言えたが、前言を聞く限り、このシスターにそんな信心深さは無いのだろう。

「どうして生きてるか、についてですが……わたくしは貴女の期待に応えられる様な答えを持つていません」

そして、自分の中で言葉を選ぶ様に間を置き、シスターは続けた。

「そうですね……生きるのに理由なんて要りませんわ。生きようとする事、生きていこうとする事に意義があるんです——これは受け売りなのですが」

どこか遠くを見つめるようにシスターの表情が一瞬変わったのを娘は見逃さなかった。

「……………」

『誰の？』とは訊かなかった。そんな事より、このおかしなシスターに興味を湧いたのかもしれない。

こんな考えの人間が居るのが嬉しかったのかもしれない。

てつきり、つまらない定型文的な返事が来るものだとばかり思っていたから。

せつかく話を訊いてくれるというのだから、この妙なシスターに色々と訊いてみようと思つた。

その時――

「――カグヤ！」

自分の名前を呼ぶ少女の声が教会に響いた。



漆黒の衣装に身を包んだ娘の口が開きかけた時、元気のいい少女の声が、続く言葉を遮った。

「ごめんね、カグヤ。待った？」

「……フィア、遅い」

現れた少女の言葉に、娘はそう応えた。

「もう。こういう時は『今来たばかりだよ』っていうのが常識でしょ？ デートの基本は五分の遅刻だよ」

「……そうなの？ でも、デートじゃないよ」

「カグヤの意地悪……。パートナーなら恋人同然でしょ？」

「……そう。そうかもね」

自分を置いてけぼりで話をされるのが不快だった訳ではないが、このままでは延々こんなやり取りを続けかねないと思い、シスター――マヘリア・メルルは一人の会話を割って入ることにした。

「お連れの方ですか？ ええと、カグヤ――さん？」

年齢はマヘリアの方が上だろうが、もはやこの丁寧口調は癖の様なものだ。

「……そう。この子はフィア」

特に気分を害した様子も無く、カグヤと呼ばれた娘が連れの少女を紹介した。

フィアというらしい少女は、初めてマヘリアの存在に気付いたかのように視線をこちらに向けた。

マヘリアは女性としては長身の部類に入るので、当然少女からは見上げる形になる。

少女の年齢は十二、三歳くらいだろうか。ゆったりとした白いシャツとハーフパンツ、そして水色の薄でのコートを着ている。コートは小柄な少女にとってはやや大きめだが、そのアンバランスさが可愛らしくも見える。カグヤの奇抜なファッションと比べれば、どこにでもいる少女の格好だ。

それに対して、髪と瞳は鮮血のように紅い。肌が白いので余計に紅い色彩が映える。少女の顔が嗤った。

可愛らしい少女だ。

だがその笑顔はどこか蠱惑的で、酷く不自然なものにマヘリアには感じられた。

「あなた、〈聖女〉様？」

「え……？」

今日は驚かされる質問をされる日だと思った。

〈聖女〉。

確かにマヘリアの事をそう呼ぶ人間は多い。自分で吹聴して回った事は無いが、彼女の事を知る人間にとつては、それなりに馴染みのある呼称だったりする。

しかし、これも真正面から問われると肯定しづらい。

卑屈になる気は無いが、そうだと明言するのも謙虚さに欠ける気がするからだ。

「まあ、そう呼ばれる方も居らっしゃいますわね」

「ふん……。教会で〈聖女〉と〈魔女〉が並ぶなんて、変な組み合わせだね、カグヤ」

そう言い、フィーアはもうマヘリアに興味を失った様にカグヤに視線を戻すと、その手を引いてカグヤを立ち上がらせた。

「もう行くこう？〈シラヒメ〉の調整も終わったんだよ」

「……うん」

変わらずぼんやりとした表情のまま、カグヤはフィーアに手を引かれて教会を後にしようとした。

「……………」

何か嫌な気持ちがあった。

このままカグヤを行かせてはいけない様な、漠然とした不安が胸中を占めた。

「あの——カグヤさん！」

「……………」

やはりぼんやりとした表情で漆黒の娘が振り向いた。

「わたくしはマヘリア・メリルと言います。御覧の通りシスターですから、教会に来てくださればいつでも会えます……だから、その」

何だ？ 何を言いたい？

否、何を伝えたいのだろうか？

判らなかつた。

それでも——

「気が向いたら構いません。また、会いに来てくださいますか？」

そうだ。また彼女と話したいと、そう思ったのだ。

「……………あたしは〈教団〉の信徒じゃない」

「関係ありませんわ。わたくしが個人的にお会いしたいだけですから」

「……………気が向いたら」

短く紡がれたのは肯定の言葉。

それだけ言うとカグヤは連れの少女に引きずられる様に教会の外に姿を消した。

「……………」

二人の姿が見えなくなったのを潮に、仕事に戻ろうとマヘリアが振り返ると、何故か非難する様な視線を受けた。

視線の主はくすんだ赤毛に褐色の肌を持つ少女。マヘリアの『妹』であるミゼット・レミントンだ。

「どうしたの、ミゼット？ 顔が怖いですわよ」

「こういう顔なんです。すみません、可愛くなくて」

どうやらミゼットは不機嫌な様だ。

『可愛くない』という言葉を妙に強調しているのにマヘリアは気付いた。

「なにを言っているの？ ミゼットはとっても可愛らしいわ」

「本当ですか、お姉さま？」

ミゼットの表情が少し緩んだが、まだ信用できないと言う風に頑なな態度は変わらな
い。

「当然ですわ。わたくしの自慢の妹ですもの」

「じゃあ……………ぎゅって、しください」

「もう、甘えん坊さん」

顔を赤らめてそっぽを向いたミゼットを、マヘリアは正面から抱き締めた。左手は腰に、

右手はミゼットの頭に回す。

「これいい？」

「……………はい——」

さすがに恥ずかしいのだろう。ミゼットの言葉は尻つぼみで、ようやく聞き取れる程度
だった。

「……………綺麗な人でしたね」

「えっ？」

「さつき、お姉さまが話をしていた人……………格好は妙でしたけど」

「あ……………」

そうだ、何故気付かなかったのだろう。カグヤは美人だ。

衣装や雰囲気に気を取られていた訳ではない。

だが、女性と聞けばまず容姿に目が行くマヘリアが、彼女の美貌に気付かなかった——
気が行かなかったという表現の方が正しいだろう。

「それで声をかけていたんじゃないんですか？」

「ミゼット……それではわたくしが色情狂みたいじゃない」

「当たらずとも遠からずです。その度たびに私がどんな気持ちでいるか——」

「……………」

嘆息たんそくしてミゼットの頭を優しくなでる。

「ごめんなさい。貴女に対する配慮が足りませんでしたわね」

「もう慣れました」

「そうっ。」

「じゃなければ、お姉さまのパートナーは務まりません」

「そうですね。ありがとうございます——ミゼット」

「……はい」

そう言つて妹を抱きしめながらも、心は件くだんの娘に向けられている自分に多少の自己嫌悪を感じた。

だが、それだけ彼女とのわずかな出会いは、マヘリアの中では大きなものだった。

また会えるだろうか。

（カグヤさん——）

次に会える事があつたら、その時はフルネームを聞いてみよう。

出来る事ならもつと彼女の事を知りたい。

そう思った。

第十話

『信じる者は救われる』——果たしてそうだろうか？

あたしは神様なんて信じない。

あたしは何も信用しない。

期待しなければ裏切られる事も無い。

喪失。失意。落胆。

そんなものを味わうくらいなら、あたしは最初から何も望まない。

要らない。

何も要らない。

ただ壊せればいい。

この世界の何もかも。

だから、あたしは信じない。

あたしは何も——信じない。

第十話 聖女と魔女（後編）

待ち合わせ場所にした教会を後にする道すがら、少女は連れれの娘に声を掛けた。

見た目通りの年齢なら十二、三歳。紅い髪と瞳が目を引く、非常に愛らしい顔立ちの少女だ。人形の様な——という比喻がしつくりくる整った容姿には生身の俗臭ぞくしゅうというものがまるで無く、どこか非現実的な存在感を放っている。

「ねえカグヤ、あのシスターとなに話してたの？」

「……………」

カグヤと呼ばれた娘はぼんやりとした表情のまま、しかし歩調を緩めるでもなく、通りに面した路地を進んだ。

こちらは少女とは明らかに歳が離れており、二十代前半くらいの娘だ。

適当に切った不揃いな髪は黒く、焦点の定まっていない虚ろな瞳もまた黒い。右目を覆う眼帯と異様な雰囲気いやおうが否応無く見る者の注意を引いてしまうが、冷静に観察すれば娘が相当な器量良しである事が判る。

だが、娘——カグヤ・イザヨイの美貌を気付かせ難くしている要因は他にもある。彼女が身に纏っている服装ファッションだ。ただのドレスとも、退廃的な様式美を持つゴシックロリータとも判別出来ないボリューム感のある衣装は、どちらであるにせよ街中を普通に闊歩する類のものではない。

「ねえねえ、カグヤ」

焦れた様に、紅い髪と瞳の少女は漆黒に身を包んだ娘の服の袖を引つ張った。無理に引けばレースやフリルがほどけてしまうのではないかと思わせる服だが、意外と作りはしっかりしているらしく、心配するような事態は起こらない。

「ねえねえねえねえ——」

「……フィア、生地が傷むよ」

手段と目的が入れ替わってしまったかのように袖を引くのが楽しくなってしまった様子の少女——フィアを一瞥いちめつしてカグヤは言った。表情からは判り難いが、彼女なりに困っているのかもしれない。

「だってカグヤが無視するんだもん」

カグヤが軽く袖を振って退避すると、おあずけをくらった猫の様に少女は口を尖らせた。

「……別に報告する様な事は話してないよ」

隠す様な風でもなく、本気でそう考えている様な口ぶりと言う。が、フィーアはそれは納得出来なかつたらしく、なおもカグヤに食い下がる。

「カグヤが世間話でもしてたつていうの？〈教団〉のシスターと？」

「……あたしだって天気の話くらいするよ。良い天気だね、フィーア」

感情のこもらない棒読みな口調だが、これがカグヤの地だ。

「そうだね。……で？」

「……………」

フィーアの言わんとする事が判らないといった様にカグヤは頭に疑問符を浮かべた。その表情は相変わらずぼんやりとしているが。

「だから、それから何を話したの？ そんなの会話のきっかけでしょ？」

多少、苛立ちを感じさせるが、カグヤとの日常会話はこんな感じなので、フィーアにしてみれば慣れたものだが。

「……あのね。神様なんて居ないんだつて」

「神様？〈教団〉のシスターがそんな事言ったの？」

フィーアの問いにカグヤはこくと首肯した。

ようやくまともな返事が返ってきたと思えば、いきなり『神様は居ない』だ。それもシスターの口から出たとなればより混乱する。

「……お願いだから、順を追って話してくれない？」

「……………」

どうしたものかと一瞬考えて——恐らくは——カグヤはフィーアの前に中腰になった。

そして少女の小さな両手を自分のそれで包み込むように握ると、

「……『貴女は神を信じますか？』」

と言った。

「——？ なにそれ、勧誘？」

「……ううん。居もしない神様を信じるより、触れ合える方が安心だつて」

「……………」

やはり要領を得ない。そのシスターはカグヤに何を伝えたかつたのだろうか？

強引に連れ出してきたので、もしかしたら会話は途中で打ち切られたのかもしれないと思つたが、カグヤが自分以外の誰かと話をしているのがフィーアは嫌だつた。

「それで？ カグヤは神様つて信じてる——わけないか」

「……居るかどうかは知らないけど、そんな奴が……あたし達のやる事にちよつかい出し

てる様な奴が居るなら、あたしはそんなもの認めない——」

一瞬だが、娘の隻眼せきがんがやや暗い光をたたえた。

「……神様が居るなら……そんなもの、世界と一緒に壊れてしまえばいいよ」

「……そうだね——うん、それでこそカグヤだよ。私はそんなカグヤが大好きだよ」

「……そう」

日曜の昼下がり。異様な二人組みは、休日で賑わう人ごみの中へ消えていった。



（イクスクルーダー——それが彼等の呼称である。）

人並みの幸福感。

平穏な日々。

普通の暮らし。

そういつた極当たり前のものを持ち得ない人間が居る。

ありふれた価値観を共有でき出来ない人間が居る。

当たり前前に平和である世界を受け入れられない人間が居る。

ただただ過ぎて行くだけの穏やかな日常……それは変化の無い、緩慢かんまんな死へ向う行為だ。そういう想いを抱えている人間がいつの世も少なからず、しかし確実に存在している。

中には、自分の味わった不幸を他人にも知らしめたいという者もいる。それはそれで理由だ。少なくとも本人にとっては正当な口実となる。

だが、それすらも持ち得ない……ひたすら空虚な感情だけを持って余している者も居る。

原因の無い苛立ちと、正体のない虚無感。これらを一生抱えて生きていくのか？

それは死よりも恐ろしい生き地獄だ。

だが多くの人間はそんなものは無い様に暮らしている。

間違っているのは自分達か？

それとも、彼等はそれらを抱えた上で生きているのか？

……判らない。少なくとも自分には無理だ。

そういう人間が集まって出来たのが、イクスクルーダーだった。

故に彼等に政治的な思想や主張は無い。

彼等はこの世界そのものに絶望してしまったのだから。

「――決行は今日の午後六時だ」

集まった約四十人ほどの集団を見渡して、リーダー格らしい男が言った。

年齢は三十代の半ばくらいだろうか。テロリストの頭目というイメージからはややかけ離れた、言ってしまえばどこにでも居そうな中年男だ。特に悪人顔という訳でもない。

「ゾイドはウイルスを感染させた無人機が十機、それから有人機のパイロットを五人募る。志願する者は？」

男の言葉に数人が手を挙げた。男も居れば女も居る。年齢もまちまちで、下は十代の後半ほどから、上は四十代の顔ぶれもいる。男と同じく、街中ですれ違っても特に印象に残らない様な何処どこにでも居そうな、一般市民然とした佇たたずまいの者ばかりだ。

主義主張など持たない。ただ現状の打破だけを目的とした、狂気や使命感とは無縁な、純粹なまでの『変化』への渴望。

挙手をした数名の人間を確認した男は、

「感謝する。志願者は選抜を行うため部屋に残ってくれ。他は以上で解散。作戦通りに行動を願う」

余計な事は言わず、必要最小限な言葉だけを男は発した。

彼の言葉に異論を挟む者は居ないらしく、ぞろぞろと集団は解散していく。

そこへ――

「リーダー」

か細い少女の声がした。

リーダーと呼ばれた男――先程まで指示を出していた中年男は、場に不似合いな少女の声に一瞬、幻聴かと自分の耳を疑ったが、声の主は確かにそこに存在していた。

年齢は十六、七歳。明らかにまだ未成年だろう。少なくともテロリストのメンバーとしては存在していい存在ではない――あくまで世間の言う『良識的に』だが。

「なんだ？」

身長が低いため集団の中に埋もれていたが、この少女には見覚えがあった。3ヶ月ほど前に組織に加わった、最年少の構成員だ。

「あの、私もパイロットに志願したいんです」

少女は言った。

例に漏れず、彼女も何処にでも居そうな普通の少女だ。

「……この組織に主義主張は必要ない。答えたくなければ答えなくても構わない」

一拍おいて男は少女を見下ろして言った。

「君がテロに参加したいという理由は？」

「……生き苦しいんです——」

男から目をそらす事なく少女は言った。

「ただ生きるのが辛いんです。こんな世界……壊れてしまえばいい。それでは理由になりませんか？」

そう言う少女の表情には怒りも悲しみも無い。思考することに疲れてしまい、考える事を放棄した者の顔だ。

対する男は、

「いや、充分だ。君がそう望むのなら、それ以上の理由など必要無い。少なくとも俺はそうあるべきだと思っている」

男の言葉に、少女と同じ様に志願して残った者達も苦笑や微笑を浮かべた。

誰もが自覚している。こんな事をやっている自分達はまともではない。

誰かに解って欲しいなどと今更思わない。

それでも男の言葉は、この場の人間達に共感を覚えさせるのに充分だった。この男の言葉は彼等の想いを代弁してくれていたからだ。

『そうしたい』——それが唯一最後に残された自分達の想いだから。

「そうですか……」

少女も場の雰囲気（ゆゑ）に気が緩んだのか、わずかに表情を崩した。

その微かな笑みは、とても魅力的なものに男は感じた。



「ZOITEC不正規技術開発部門——通称（ファントム）は本日をもって解散」

何の前置きも無く、白髪混じりのぼさぼさな頭をした白衣の男は言った。

名前は公にはされていない。ただ〈教授〉とだけ呼ばれている。

年齢はよく判らないが、おそらく四十代そこそこといった処だろう。研究以外は興味がない——そんな印象がありありと感じられる。

「以後、同部門は〈ミラージュ〉として再編成。特に構成に変更は無い」

「……………」

「……………」

事務的に言った男——〈教授〉の言葉に、〈ファントム〉改め〈ミラージュ〉のメンバーである処のカグヤ・イザヨイとフィータは、無言で返答とした。

だが同じ反応でも、それぞれの心情はまったく別だった。

紅い髪の少女の感想は『またか』だった。

この部門に配属されてから既に何度目かの便宜的な手続きだったからだ。何が変わる訳でもない。故に目新しい反応など出来るはずもない。

一方、漆黒の衣装の娘はもはや〈教授〉の言葉など頭に入っていない。音としては捉えているが、完全に『右から左へ通り抜けている』状態だ。

「……………」

彼女の意識は〈教授〉越しに、キャットウォークの向こう側へ向いていた。

「まったく……。ちったあ、部門班長に敬意を払えよな」

特に気を悪くした素振りも見せず、言葉面だけで〈教授〉は言った。もはや彼女達の態度に慣れているのだろう。

「すみませんでしたー。チーフ、愛シテマース」

投げやりな態度でフィーアが応えた。

「そうかい。それはおじさんウレシイナー」

こちらも意趣返しのもりか相当投げやりだ。

「むっ。やられると腹立つな」

「だろ？」

してやったりといった感じで〈教授〉は片目をつぶった。不器用なウインクは恐ろしいまでに似合っていなかったが、これが彼なりの愛嬌なのだろう。

「……………」

そんな二人のやり取りには我関せず——というか、まったく意識に入っていない——といった様子でカグヤは一心不乱に前方だけを見ていた。

視線の先——そこには生まれ変わった愛機の姿があったからだ。

「もう……カグヤはさっそく〈シラヒメ〉にご執心だね」

「……色々、変わってる」

〈シラヒメ〉という単語に反応したのか、カグヤが視線は前方に向けたまま、声だけで訊いた。

「そっだよ。前回の戦闘の修復は勿論、調整も完璧。武装も〈ジエノザウラー〉から上位機種の〈ジエノブレイカー〉に換装したの」

「……〈ジエノブレイカー〉？」

「——説明しよう！」

待ってましたとばかりに紅い髪と瞳の少女は人差し指を立てて説明口調になった。

「さっき言ったとおり〈ジエノザウラー〉の上位機種でね。バリエーションとは呼べない

位に『まったく別の機体』に仕上がったスペシャルなゾイドだから、機体名も新たに与えられたんだよ」

「もつとも、中身は前とおんなじがな」

黙って聞いていた〈教授〉が口を挟んだ。

「……おんなじ？」

「元々、〈シラヒメ〉は〈ジェノブレイカー〉になれるだけのゾイドコアの出力はあったんだけど、装備の開発が追いつかなかったの」

「〈ジェノブレイカー〉のデータ自体も完全には残って無いしな」

カグヤの疑問にフィアと〈教授〉が応えた。

「塗装もようやく出来たし、これで真正正銘の〈白姫〉だね」

補足する様に言うフィアの声を聞きながら、改めてカグヤは愛機を見上げた。以前は『骨』を思わせる白というよりはベージュに近かった色が、今は純白もかくやといった白に染めあげられている。

次にカグヤの目を引いたのは、機体の背部に設置された荷電粒子コンバーターとウイング・スラスタ、そこから左右に突き出したフリー・ラウンド・シールドの存在だ。シールド内には特殊チタン合金製の近接戦闘用装備、エクス・ブレイカーが仕込まれている。

〈ジェノブレイカー〉が〈魔装竜〉と呼ばれる所以でもある装備だ。

「どう？ 気に入った？」

フィアはカグヤの反応が楽しみらしく、そわそわしている。

「……いいね。早く乗ってみたい」

「ああ、早速やって貰うよ。ここも〈教団〉の目が厳しくなってるからな、〈イクスクルーダー〉の決起に合わせて、ドサマギで脱出する」

「……あたしは部隊が撤収するまでの時間を稼げばいいのね」

「そうだ。〈教団〉と〈イクスクルーダー〉——どちらに肩入れする必要もないが、共通の敵をもつ身としてはテロリストと共闘すべきかと思うがね。そこら辺の判断は現場に任せるよ」

「……判った。話はもうお終い？」

一刻も早く〈シラヒメ〉に搭乘したいのだろう。カグヤの表情はいつになく高揚している様に見えた。

「やれやれといった風に〈教授〉は嘆息した。

「うん、いいよ。さっそくテストしてみよう、カグヤ」

「……うん。実戦テスト、ね」

カグヤが新たな愛機のコクピットに乗り込むと、続いてフィーアもメイン・シートの後
に備え付けられたサブ・シートに乗り込む。

——グウルルルルルル……。

低くうなり声を上げると共に〈シラヒメ〉の二つのカメラ・アイが光を灯す。

「……カグヤ・イザヨイ——〈シラヒメ〉、出る」

純白の〈ジェノブレイカー〉が静かに起動する。

「……〈魔女〉の出陣だ」

遠巻きとおまにその様子を窺うかがっていた〈ミラージュ〉のスタッフ達が、誰ともなしにそう口
にした。

〈魔女〉——それはカグヤの異名だ。

『ゾイドを惑わす魔性の女』——故ゆえに〈魔女〉。

——グウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

〈魔女〉に魅入みいられし純白の姫ひめが咆哮ほうこうした。



〈教団〉に所属する、戦闘行為を担当する部門は2つある。

ひとつは『獵犬』の名をコール・サインに持つ歩兵隊員。彼等は破壊工作や諜報ちようほう活動、
市民の避難誘導等を主な任務とする生身の兵士である。

もうひとつは『女神』の名をコール・サインに持つゾイド乗り。小型ゾイド一機でひと
つの部隊として行動を許され、対ゾイド戦を主にしながらも、〈代行者〉としての権限も
持ち合わせている。

『こちらへスティア、西B地区にて戦闘中。援護の要請を——』

『アテナよりポインター、住民の避難を急がせて。このままじゃ——』

『南S地区はなんとかなる。それよりE地区が——』

『北地区へはアンフィトルテが行きます。以後は現場の判断で——』

通信機越しに聴こえる声は混乱を極めていた。

時計の鐘が午後六時を知らせたと同時に混乱は起きた。時報と同時にミヤコノ・シティの数ヶ所で小型ゾイドが現れ、破壊の意思を示した。

手口は〈イクスクルーダー〉の一連のものと同じ。放置されたコンテナや大型車の貨物室から飛び出しては好き勝手にゾイドを暴れ回させるというものだ。

〈教団〉はすぐさまこれに対処。『猟犬』を先行させ、わずかに遅れて『女神』も出撃。民間のゾイド乗りにも増援を要請した。

〈教団〉の戦力に対応するには数が多すぎたのだ。

そして数分後、更に状況は悪化した。

〈教団〉の戦力の出撃を見計らったように新たな敵機が出現。その数は当初の一・五倍程に増強されていた。

「——インパクトッ！」

金髪のシスターの裂帛の気合に応える様に、強化型ゴドス・タイプ——〈ビアトリス〉は、その全高にも匹敵するパイルバンカーを振りぬく。その先端が敵機の腹部に突き刺さると共に槍が打ち出され、敵機の活動を停止させた。

「ミゼット！」

愛機〈ビアトリス〉のkokピットでマヘリア・メリルはその端正な顔を焦りの表情に変えていた。撃墜数は今の〈レブラプター〉で二機目。更に三機の敵機に包囲されていた。

「牽制はこちらでやります。お姉さまは接近する奴から——」

マヘリアのシートの後に座る赤毛の少女——ミゼット・レミントンが応えた。が、こちらにも余裕が無いらしく言葉尻は途切れていた。

〈ビアトリス〉の左腹部に装備されたマシン・キャノンがミゼットの制御で火を噴き、別の〈レブラプター〉を牽制し、右腕に装備された主武装であるパイルバンカー〈セイクリッド・ランサー〉が接近した〈ヘルキャット〉の爪を弾き飛ばした。

彼我兵力差は二対三。

同クラスの小型ゾイドが相手であれば、まず遅れを取る事のない〈ビアトリス〉だが、数の優位は覆せないでいた。むしろ、一対五だった状況でよくここまで持ち堪えたと言ええる。

〈ビアトリス〉は敵機に囲まれない様に位置取りを行いながら後退。しかし、火器も装甲の耐久値も無限ではない。

「マシン・キャノンの残弾無し！ 機体の損傷度も危険域に入ります……！」

「まずいですわね」

ミゼットの悲痛な叫びに、マヘリアはなんとか平常心を保って独り言の様に呟いた。
「……ミゼット、貴女と。ペアを組んで良かったわ——」

突然の姉の言葉に妹である少女は絶望に近い感覚を覚えた。

「お——お姉さま……なにを……?」

冗談だと言って欲しかった。まだ手はある——ハツタリでもいい、そう言って欲しかった。最期の瞬間までマヘリアは弱音など吐かない、気高い存在であって欲しいと思っていたから……。

「ふふふ——冗談ですわ」

「——え?」

かくしてミゼットの希望は現実へと転化した。

〈ピアトリス〉にじり寄っていた三つの敵機が、何かに反応して揃って同じ方向を向いた。

それと同時にミゼットは〈ピアトリス〉のレーダーが接近する機影を捉えているのに気付いた。

「これは……?」

ミゼットが接近する機影を肉眼で確認するより早く、一機の〈ヘルキヤット〉が赤い光条に貫かれた。六つの光の束が雨の様に直上から降り注いだのだ。

「……ホ、追尾式連装光学兵器?」

言い終わると同時に、気付いたかの様にレーザー照射を受けた〈ヘルキヤット〉が崩れ落ちた。

更にミゼットの視界を漆黒の機体が駆け抜けた——オオカミ型のゾイド。コマンドウルフ・タイプと確認するが早い、その機体は大きく跳躍すると別の〈ヘルキヤット〉の背部に着地。その背中にストライク・クロウを突き立てた。

何が起こったのか判らないまま二機目の〈ヘルキヤット〉も撃破された。

——ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ!

残った二機の〈レブラプター〉は、突然現れた漆黒の〈コマンドウルフ〉の咆哮に怯えた様に後ずさった。

全身を黒く染めながら、その各所には紅いラインが入れられた、どこどなく女王の気品を感じさせるゾイドだ。

ミゼットは知っている。

それは闇色の姫。

故に〈闇姫〉。

またの名を〈漆黒の狂襲姫〉。

『——よ。何でも屋の入用はないか？ 安くしとくぞ』

通信は今まさに現れた黒い〈コマンドウルフ〉からだ。音声と共に画像も表示され、そこには二十代前半だろう青年の姿を映していた。愛機と同じく、やや長めの黒い髪と瞳。気怠い表情。

アサト・タチバナ。

〈クスノセ機獣派遣事務所〉に所属する、所謂民間のゾイド乗りというやつだ。

「な——何言ってるの、バカじゃないの!？」

安堵あんどよりも何よりも、ミゼットは理不尽な怒りにも似た感情に駆られていた。

「一大事なの!〈教団〉への協力は市民の義務よッ!」

「そう言いつつ嬉しそうね、ミゼット?」

ミゼットとは対照的に、既に平静を取り戻していたマヘリアは、妹の憤慨しつつも喜色に染まった表情を見て言った。

「お、お姉さまッ!？」

『……おい、タダ働きは免だぞ』

二人のやり取りなど知った事ではないとも言いかのようにアサトは口を挟むが——
「黙りなさい、ボンクラ! お姉さま、こんな奴に助けて貰う必要ありませんよ!」

『……………』

ミゼットの怒声によって一蹴いっしゅうされた。

「残念だけど、そうも言っていられないわ、ミゼット」

姉の言葉にミゼットがリーダーに目を戻すと、残った一機以外にも新たな敵機の反応があった。

「新手です! 数は……三機!？」

「そういう事ですわよ。——アサトさん、機体の整備・補給は無償で行います。それと報酬金くらいは出させて貰いますが、如何でしょうか?」

人当たりのいい笑みを浮かべ、マヘリアは言った。

『あいよ。商談成立だ』

アサトはそう言う通信を早々に終え、残る一機の〈レブラプター〉に踊りかかった。

先ほどの咆哮に怯え、戦意が萎なえてしまった敵機にもはや抵抗する力はなかった。

「——さてミゼット、こちらも負けていられませんわ。まだ動きますわね?」

マヘリアのそれは質問ではなく確認だった。

「と、当然です！ マシン・キャノン強制排除。ダメージ・コントロール。各部チェック

——オールOK。行けます！」

ミゼットは表情を正し、情報を読み上げていく。

「上出来ですわ。それでこそわたくしの妹です。——〈ビアトリス〉！」

——グウオオオオオオオオツッ！

マヘリアの声に応える様に片膝を突いていた機体を持ち上げ、満身創痕の恐竜型ゾイドが吼えた。

『まだ戦える』——と言う様に。



新手は三機——小型ゾイドであれば〈ヤミヒメ〉の敵ではない。だが、やはり複数を相手に油断は出来ない。

「その前にこいつは墜としとかないな。——ん？」

すっかり戦意を喪失した様子〈レヴラプター〉に目標を定めつつ、アサト・タチバナは愛機の思念を感じた。

『使え』——と。

「さっそくか、堪えない性のないお嬢さんだ」

駄目押しする様に〈ヤミヒメ〉の思念がアサトの思考を刺激する。

「判ったよ。——クノキ、〈レヴアンティン〉を使うぞ」

『……了解』

アサトの呼びかけに女性の声を思わせる無機質な機械音声に応えた。〈ヤミヒメ〉に搭載された自律型戦術支援人工知能装置であるクノキだ。

もつとも、ただの人工知能が主の命令に遂巡を見せる事など無いだろうが。

「なんだ、不満か？」

『強奪に近い形で持ち込んだ装備を使うのはお勧め出来ません』

「倫理的にか？」

『システムのな話です。コントロール・デバイスに不備がある場合があります』

「そうかい。そこはお前の裁量でなんとかしてくれ」

『……了解しました』

言うだけ無駄と判断してか、クノキは主との問答を切り上げ、自分の仕事を開始した。
 〈コマンドウルフ〉のカスタム機である〈ヤミヒメ〉の特徴のひとつに、オリジナルを凌駕する『装備の汎用性』がある。背部に増設されたアタッチメント・システム〈シダレザクラ〉。これにより、様々な武装を状況に応じて『持ち換える』事が可能なのだ。

現在そこには、見慣れぬ特殊な形状をした板状の物が二つ——恐らく『剣』だろう——装備されていた。

そのうちの機体右側に装備されていたものが、アーム支持腕によって、〈ヤミヒメ〉の口元まで運ばれた。

〈ヤミヒメ〉がその『剣』の柄をつか握ると、アーム支持腕は『剣』を離して元の位置に戻った。

「〈紫電一閃——」

『〈レヴァンティン〉 イニシャルイス起動。 セーフティ・リリース安全装置解除。 スタンバイ・レディ使用可能です』

アサトの激発音声トリガー・ヴォイスに応じて、クノキによる武装の使用承認が行われた。

「〈レヴァンティン〉——叩き斬れッ！」

機械の剣——そう呼ぶに相応しいメカニカルな意匠デザインのそれを構え、けさぎ袈裟斬りの要領で斜めに振り下ろすと、〈レブラプター〉はなすす為す術も無く胸部を切り裂かれその場にくず折れた。

機剣——〈レヴァンティン〉は刃に相当する白刃をバチバチと放電させると、すぐさま本体の冷却作業に入った。

「使えるじゃないか」

『ですが、万全は期すべきです。使用回数は良くてあと五回とお考えください』
 満足げなアサトに対し、クノキはあくまで淡々と応えた。

「あいよ。次が来るぞ」

三機目の敵機を墜とすと、新手の三機が入れ替わる様に姿を現したのはほぼ同時だった。

レブラプター・タイプが三機。

『マスター、サイモ・センサ熱探知機に反応。有人機です』

「ウイルス任せの無人機は打ち止めか？」

マヘリア達の元に駆けつけるまでに実は三機、つしう都合六機のゾイドを撃墜してきたが、これらは全て無人機だった。搭乗者の腕にもよるが、基本、有人操作の方が動きが読みづらく手強い場合がほとんどだ。

《ヤミヒメ》を敵と判断したのだろう。定石どおり、こちらを包囲する隊形を採って来た。

だが――

「都合だ」

アサトは怯まない。むしろ状況を楽しんでさえた。

《ヤミヒメ》は既に先ほどの武装を格納し、もう一本の『剣』をその口に咥えていた。

「飛龍一閃――」

トリガー・ヴォイス
激発音声。クノキの使用承認がそれに続く。

「《シユランゲバイセン》――薙ぎ払えッ！」

機体ごと大きく《ヤミヒメ》が咥えた武装を振り抜くと、『剣』の基部の円状のパーツが回転。刀身が何十にも分割され、ワイヤーで繋がったそれはもはや『剣』ではなく『鞭』だった。

《ヤミヒメ》がその場でほぼ一回転すると、畢竟、『鞭』も円を描くように一回転する。

それはとてつもない圧力を発生させ、遠心力を上乗せした衝撃波となり、周囲のあらゆる物体を吹き飛ばした――まさに薙ぎ払うかの様に。

三機の《レブラプター》は回避する事も出来ず衝撃波に打ちのめされ、機体をひしゃげながら吹き飛ばされる。

その場に立っているのは既に《ヤミヒメ》だけとなっていた。



「……………すごい――」

ミゼットは呆然と呟いた。

圧倒的などという言葉では足りない。もっと何か……そう、驚異的という言葉が相応しいだろう。

それほどまでに《ヤミヒメ》の戦いは一方的だった。否。戦いとすら呼べない。

マヘリアの判断で物陰に隠れなければ、自分達も先ほどの『鞭』による攻撃の余波を受けていたかもしれない。

「お姉さま……あれが《漆黒の狂襲姫》と言われる所因なんですか……？」

その声は畏怖すら含んでいる様に聞こえる。

「あんなものではないわ。あの機体の本当の力は――」

対するマヘリアの応えはどこか淡淡としていた。

「え？」と続く妹の言葉を遮るようにマヘリアは通信を開いた。

「——アサトさん、ご苦労様です。時に、なんですか？ その武装は」

マヘリアが〈ヤミヒメ〉の見慣れない武器を指して言った。

『ちょうど整備中だな。〈カグツチ〉と二五〇ミリ改無しじゃ心許なかったんで借りてきた。ムラサメ・ファクトリーの試作品だ』

アサト・タチバナの返事に、『強行軍にも程があります』と〈ヤミヒメ〉のサポートユニットであるクノキが口を挟んだ。

ムラサメ・ファクトリーはアサトが最前ひしきにしているゾイド用の兵器開発メーカーのひとつである。

「……そうですか。まだやれそうですか？」

細かい経緯はあえて訊かず、マヘリアは確認すべき事を訊ねた。

『ん。問題ないが……どうした、赤毛？』

通信画像のアサトが、マヘリアの後方に目を向けて言った。

「あ、赤毛って言うなッ。このボンクラ！」

『お前がボンクラを撤回したらな』

「そんな日は永遠に来ないわよッ！」

すっかり普段の様子を取り戻したミゼットに安堵しつつ、

「ミゼット、そこまでになさい。まだ状況は続いているのだから」

と微笑すら浮かべながらマヘリアは言った。

アサトが相手になると途端にムキになる妹の姿が微笑ましくて仕方がないといった処だ。

「す、すみません」

姉に言われてしまつては引き下がるしかない。なにより、他では戦闘はまだ続いているのだ。

ミゼットはすぐさま戦況を分析。情報を整理する。

「戦況はこちら側が押し返しています。テログループの制圧は時間の問題だと思われます」
序盤は数と奇襲でテロリスト側に押されていたが、質では完全に〈教団〉が上だ。

アサトの様な民間の戦力と合流し、持久戦に持ち込めば『守る』側が優勢になる。

「そのようすわね」

ミゼットのまとめた戦況分析はマヘリアの眼前に表示された表示窓にも共有され、〈ヤミヒメ〉にも送信されている。

『じゃあ俺はこのまま周辺の敵を……なんだ？』

「アサトさん？ どうされましたの？」

不意に言葉を切ったアサトにマヘリアは疑問の声をかけたが、応えたのはミゼットだった。

「お姉さま——こ、高熱源体、急速接近！ 荷電粒子砲です！」



視界がまばゆい閃光に包まれるのと、耳をつんざく轟音が響くのはほぼ同時だった。

クノキの咄嗟の判断により機体を『限定起動』状態に移行。〈ヤミヒメ〉の前方を守る様にEシールドを発生させたのだ。

荷電粒子砲とEシールドが衝突する。荷電粒子砲の照射は続く。

「ちい……クノキ！ 索敵を——」

『状況が安定するまでは不可能です。今は耐えてください』

アサトが状況を確認すると、すぐさまクノキに次の指示を与える。が、戦況がそれを許さない。クノキの処理能力をもってしても荷電粒子砲を受け止めるので精一杯だった。

警報がコクピットに鳴り響き、ガタガタと振動が襲う。

「耐えろ〈ヤミヒメ〉！」

愛機を鼓舞するアサト。

パイロットの弱気は愛機に不安を与える。だが逆に言えば、精神リンクで繋がったパイロットの意志はゾイドに力を与える。

〈ヤミヒメ〉はアサトの想いに応えるように四肢に力を込めると、衝撃を受け止めるように地面に強く踏ん張った。

低く漆黒のオオカミが吼え、Eシールドの出力が上昇する。

青い燐光が輝きを増し、荷電粒子を弾き続ける。

やがて衝撃が徐々に収まり、アサトの視界を覆っていた閃光が晴れた。

その視界の先。荷電粒子砲でえぐられた地面には熱が立ち込め、その先にいる機体のシルエットをぼやけさせて見せる。

距離は既に百メートルと離れておらず、その機影がやがてはっきりと確認できた。

純白のカラーリングを施されたティラノサウルス型ゾイドだ。

「……クノキ。奴か？」

アサトはそのゾイドに見覚えがあった。武装と色が変わっているが、このタイプの機体

は現在ほほ他に存在しない。

『データ照合。武装とカラーリングに変更が見られますが、同一の機体と思われます——
〈シラヒメ〉です』

クノキはやはり淡々と事実を述べていく。

『あの機体は〈ジェノブレイカー〉。〈ジェノザウラー〉の上位機種ですが、その格闘性能は別物です。特に接近戦の際には、左右のフリー・ラウンド・シールド内に装備された
エクス・ブレイカーに注意してください』

アサトの眼前に表示窓が展開し、エクス・ブレイカーの概略図が表示される。

「なるほど、カニバサミか」

クノキによって示された概略図から感じたアサトのイメージはそれだった。

すると、ピツという電子音と共に〈ヤミヒメ〉のコクピットに通信回線が開かれた。送り主は件の白い〈ジェノブレイカー〉からだ。

「……よう、また会ったな——カグヤ・イザヨイ」

道で知人とすれ違ったような気楽さで、アサトは通信相手の名前を呼んだ。

〈シラヒメ〉のデータと一緒に記録してある。以前と変わらぬ黒い衣装と退廃的な雰囲気
の娘だ。

『……ええ。久しぶり、アサト・タチバナ。あたしの名前なんか覚えていないかと思ってた
けど……意外ね』

通信相手の娘——カグヤの印象は間違っていない。アサトは他人の顔と名前を覚えてない
タイプだ。データが残っていないれば彼女の名前も覚えてはいなかっただろう。

しかし、この娘の持つ一種異様な雰囲気は忘れようがない。命のやり取りをした相手と
もなれば、顔ぐらいいは嫌でも覚える。戦闘服とは思えないゴスロリ・ファッションもその
一端は担っていいようが。

『はあい、アサト！ 私も居るよ！』

そしてカグヤが居るのであれば、当然、複座にはもうひとり少女が居た。

『私に会えなくて寂しかった？ アサトがいいなら、ずっと一緒に居てあげるよ？』

カグヤの通信画像に割り込んできたのは十二、三歳の少女だ。鮮血の様な紅い髪と瞳の
少女……。

「フィーアだったな。お前には訊きたい事がある」

この少女も同様だ。以前の戦闘で自らフィーアと名乗った。無邪気そうでいて蠱惑的な
表情を浮かべる様は、明らかに中身と入れ物が釣り合っていない様にアサトは感じる。

『いいよ。女の子の秘密、いくらでも教えてあげちゃう。ただし、私達に勝つてからだよ？』

「……………」

やはりそうだ。この少女はどこかおかしい。

いや、おかしいのは娘の方も同じだ。

彼女達が〈シラヒメ〉と呼ぶ機体も。

あるいはアサト自身も、彼女らとそう違いないのかもしれない……。

『——カ、カグヤさん!?!』

アサトの思考を断ち切ったのは、通信による会話を聞いていたのであろうマヘリアだった。後方に目を向ければ彼女の愛機〈ビアトリス〉も健在だった。

『カグヤさん！ マヘリア・メルルです！ どうして貴女が……?!』

状況を認識できない——いや、理解するのを拒否する様にマヘリアは狼狽ろうばいしていた。

その取り乱しように、〈聖女〉と呼ばれる気品や物腰はお世辞にも感じられない。それだけが動転しているのだろう。

「マヘリア、あなたの知り合いか？」

アサトの問いに応えたのは当のマヘリアではなく、カグヤだった。

『……奇遇、でもないか。あなたが〈教団〉の人間なら、こういう可能性も充分にありえた……』

漆黒の衣装に身を包んだ娘は、やはりなんの感情も見せずに言った。

『……あなたの話は面白かった。神様なんて居ない……そうでしょう?』

焦点の定まらない隻眼せきがんでこちらを——否、通信画像のマヘリアをぼんやりと見てカグヤは言う。

『——そんな話より、すぐにその機体から降りてください！ 詳しい話は後で訊きかせて頂きますわ……だから——』

必死な様子だ。カグヤとの関係は知らないが、マヘリアにとっては重要な相手なのだろうとアサトは判断した。

「マヘリア、こいつは端はなからやる気だ。ゾイドに乗ってるんだからな」

『けど——』

『お姉さま！ 新手が……小型ゾイドが一機、教会に向かっています！ なんでこんな今頃!?!』

既に勝負は決している。このタイミングでたった一体の援軍など何の意味もない。それが勝つための増援であれば……。

「相手はテロリストなんだろう？ 連中にとっての勝利条件——目的はなんだ？」

『え？ アンタ、何言ってるの……?!』

テロリストの目的を察したのであろうアサトの発言に、ミゼットは訳が判らないといった様子で言葉を発した。

今回の手口は〈イクスクルーダー〉の起こした一連のテロ行為と同一だ。彼らに政治的な思想や主張は無い。実際、これまでの犯行声明にそういった類たぐいの要求は一切無かった。

『……行きましよう、ミゼット。この位置ではわたくし達でないと間に合わないわ』

『お、お姉さま……？』

マヘリアは気付いたのだろう。迷いを振り切るように思い切り操縦桿そうじゅうかんを引くと、〈ピアトリス〉を新たな敵機に向けて走らせた。

今は〈教団〉のシスターとしてやらなければならない事がある。

『アサトさん……ここは任せますわ——』

「あいよ」

『カグヤさん……また後ほど』

『……………』

カグヤは無言。通信が切れる前に一瞬見せたマヘリアの、葛藤と苦悩に満ちた表情は痛ましかった。



〈イクスクルーダー〉の作戦は三段構えだった。

第一段回は無人機による陽動。

第二段階は時間差での有人機による〈教団〉と、それに味方する敵戦力のあぶり出し。

そして最終段階が空からになったであろう『目標』への、単独による奇襲だった。

「……………」

少女は初めて乗り込んだ愛機をひたすら走らせた。〈イクスクルーダー〉の集会でパイロットを志願した少女だ。

彼女の乗機は〈ヘルキャット〉。

高速戦闘と隠密行動に特化した小型ビョウ型ゾイド。旧型でありながら高いステルス性と走破性を持ち、〈密林の暗殺者〉とも呼ばれた名機だ。

先ほど、なけなしの整備で展開を可能とした光学迷彩は切れ、今や頼れるのは自機の脚だけとなっていた。だがそれでも充分に距離は稼いでくれた。『目標』はもう目と鼻の先と言える。

〈イクスクルーダー〉の『目標』——それはこの世界の平和の象徴である〈教団〉、その

本部である教会だ。

それを破壊する事に意味は無い。

それで何が変わるわけでもない。

だが、自分達の鬱屈うっぷくとした想いは、何かを壊す事でしか報われない。

この『自分達以外が幸せな世界』——その象徴を。

「……………」

何を思っただりリーダーがこの役を自分に任せたのかは判らない。単なる気まぐれか、何らかの勝算があったのか。

どちらにせよやる事は変わらない。ここまで来てしまったのだ。

唯一の火気であるレーザー機銃の照準を白い荘厳な建物へ——ステンドグラスの窓を埋められた教会へ向ける。ロクな整備もしていない代物しろものだ、安全装置などない。あとは引き金を引くだけ。だが——

「……なに、どうして？」

引き金が引けない。いや、指が動かない。

ここに至って自分の行為に疑問を覚える。それは教会という建物の持つ神秘性がそうさせたのかもしれない。

冷静になって周囲を見渡す。

瓦解した建造物と、あちこちで上がる火の手。

遠くからは爆音と、金属が砕け散る音も聴こえる。

戦闘はまだ各所で続いている。

〈イクスクルーダー〉の決起に便乗した他の組織によるテロ。それはあらかじめ想定していた事だった。〈教団〉相手に一戦交えるなら数が要る。だから組織のネットワークを通じて決起の情報を流した。

ここまで大規模に動いたのだ、失敗は許されない。

既に〈イクスクルーダー〉は今回の決起に戦力を使い切ってもいる。背水の陣とってもいい。

「なのに……どうして……？」

ただ指を動かし、教会を破壊する。それが出来ない。

この世界で平和を——幸福を享受きょうじゆしている者達に思い知らせるのではなかったのか？

犠牲の上に成り立つ、どんなに脆く儂い世界であるかを。

犠牲になっている者達が居る事を。

それなのに……。

「どうして……………」

次の瞬間、衝撃と共に少女の視界は暗闇に閉ざされた。

〈ヘルキャット〉が機能を停止し、コクピットの照明が落ちた。

なんの操作もしていないのに頭部に当たるカバーが開き、操縦席が開放された。

「なに…………どうして?」

訳が判らず動転する少女が次に見たものは、自分に向けられる拳銃の銃口だった。



「手を上げて、弁明の機会が貴女にはありません」

マヘリアは愛用のハンドガン〈グロック〉を〈ヘルキャット〉のパイロットに向けた。

こうなった経緯はどうという事はない。

動きを止めた〈ヘルキャット〉に対し、マヘリアは速攻を決断。全速力で〈ビアトリス〉を肉迫させると、敵機のコンバット・システムを一撃で打ち抜いたのだ。

恐らく〈ヘルキャット〉はリーダーもほとんど死んでいたのだろう。〈ビアトリス〉の接近にまるで気付く素振りも見せず、レーザー機銃を構えた姿勢のまま、その場にくず折れた。

その後、愛機をミセットに任せ、マヘリアは単身〈ヘルキャット〉のパイロットを捕縛すべく乗り込んだのだ。

搭乗者が少女である事に一瞬躊躇したものの、拳銃は下ろさない。

どこにでも居そうな一般人がテロに参加する。珍しい事ではない。

「…………〈教団〉のシスター?」

「そうです。投降なさい。貴女はまだ罪を犯していませんわ」

詭弁だ。少女が〈イクスクルーダー〉であれ、便乗した別組織の人間であれ、無許可でゾイドを動かせばそれだけで犯罪行為だ。

「投降はしない。殺して」

少女の顔には何の表情も見られない。何にも期待していなければ悲壮感も無い。考える事に疲れてしまった人間の顔だ。

この顔をマヘリアは見た事がある。〈漆黒の狂襲姫〉と呼ばれるゾイドのパイロットと、今日知り合ったばかりの娘だ。

「もうたくさんなの。こんな世界で生き続けるのは…………もうたくさんなのよ!」

そう叫んだ少女の顔にはやはりなんの表情も見られなかった。

「——ッ！」

マヘリアは苛立った。

何故こんな顔をする。何故あきらめてしまうのだろうと。

判っている。自分に彼等の気持ちが解らないのと同様、彼等にも自分の気持ちは解らない。

考え方が、見てきたものが違うのだから。

それでも伝えたかった。この世界は悲観するだけのものではないと——

「『こんな世界』かもしれません。それでも貴女あなたが生まれてきた世界です。綺麗事を言うつもりはありません——いえ、わたくしが貴女に何か言う権利さえ無いかもしれません。それでも……」

マヘリアは〈グロック〉を下ろして少女を抱きしめた。

「——！」

「生きる事をあきらめないでください。貴女達は世界に拒こほまれていると思っっているかもしれませんが、それでもわたくしは貴女達に生きて欲しい。生まれてきたことを後悔しないで欲しい」

少女の身体からだが震える。

「勝手な事言わないで……そんな、無責任な事……」

「はい。これはわたくしの身勝手な願いです」

身体からだの力が抜け、嗚咽おえつを漏もらす少女を抱きしめマヘリアは思う。この少女は救いを必要としていたのだと。恐らくは誰もがそうだ。解るはずがないとあきらめていても、最後の一線では本当は解って欲しい、救いの手を差し伸べて欲しいのだと。

（カグヤさん……貴女もそうなのでしょう？）



二体の『姫』の戦闘は大詰めを迎えていた。

〈シラヒメ〉は左のフリー・ラウンド・シールドを失い、〈ヤミヒメ〉は前回の戦闘では装備していなかった奇妙な『剣』を破壊された。

「カグヤ、もう時間がないよ。これ以上ここに居ると脱出出来なくなる」

「……………」

フィーアの言葉にカグヤは応えず、右のエクス・ブレイカーを振り下ろした。対する〈ヤ

ミヒメはこれに応じず後方に跳躍。距離を取った。

「カグヤってば！ これ以上時間をかけると〈教団〉の連中に捕まっちゃうよ。今日はここまでにしよう」

「……わかった。その前に——」

再び通信回線を開くと、カグヤは〈ヤミヒメ〉のパイロットに呼びかけた。

『——なんだ？ 敵と話をしながら戦う趣味はないぞ』

そう言いながらも応えたのは当然、黒い髪の青年——アサト・タチバナだ。

何かに疲れたような印象のある表情はそのままだが、戦っている時の彼は、どこか高揚している様にも見える。

「……あなた、どうして生きてるの？ どうして生きていられるの？」

『あ？』

「……あたしにはわからないの。どうして生きてるのか」

『……………』

カグヤの言葉に対し、アサトは無言を返した。

何を言っているのか判らないのではない。何と返したらいいのか判りかねているといった表情だ。

「……あなた、あたしと同じでしょう？ どうして生きてるかわからない。いつ死んでも

いいと思ってる——死にたがり」

『……勝手に同じにするな。だったらなんだ？ 同族意識か？』

アサトは淡々と続ける。

『同情でもしてるつもりか？ それこそ余計なお世話だ』

「……そう、つれないのね」

応えるカグヤもやはりその口調に感情はない。

「……さようなら。また会いましょう、〈漆黒の狂襲姫〉」

『……………』

スラスターを全開にしてその場を離脱する〈シラヒメ〉に対し、〈ヤミヒメ〉は動きを見せない。追撃する気はないのだろう。

「追っ手が掛かる前に脱出するよ、カグヤ。まだ周囲に敵影なし」

「……うん」

「あーあ。結局、今日も痛み分けだね」

「……そうだね」

フィーアへの相槌もそこそこに、カグヤはコンソール下のピル・ケースに目を移した。

「最近、錠剤を飲む量が明らかに減っていた。

（……フィアと出逢ってから？）

「カグヤ、どうかした？」

パートナーの無言をどう思ったか、紅い髪と瞳の少女が複座からこちらを覗き込んでいた。

「……なんでもないよ、フィア」

城壁を飛び越え、ミヤコノ・シティを後にする。後方に遠くなっていく街にわずかに想いを馳せた。

——『カグヤさん……また後ほど』

そう言ったあのシスターはどうしただろうか？

（……マヘリア・メリル）

機会があればまた会ってみたい。そんな感情を抱いたのは久々だ。

「……また、ね」

「？ カグヤ、何か言った？」

「……なんでもない」

この日、ミヤコノ・シティは〈大戦〉終結後、最大規模の被害を被った。

〈教団〉側の被撃墜ゾイド数・八機。

死者・二百八人。

負傷者・六百五十人以上。

テロの主力グループであった〈イクスクルーダー〉のメンバーはそのほとんどが捕縛もしくは自害した。

第十一話

もしこの世界がひとつの物語だったとしたら――

当然、『始まり』から『終わり』まで全てを記された台本が存在するはずだ。始まりが

『過去』なら、読み終えた箇所かしよが『現在』、そして終わりは『未来』を意味する。

もし、『この世界という物語』の台本を読むことが出来れば、それは未来を知る事と同義となる。

無論、これはそんなものが『あったとしたら』だが……。

第十一話 アポカリプス

始まりは一冊の『本』だった。

〈教授〉に渡された本。それは本の体裁ていさいをしていたが、装丁そうていにはタイトルも著者の名も記されていないかった。極端に薄いその本を捲めくると、途端とたんにカグヤの意識に映像が浮かんだ。二体のゾイドが戦っている。一方は漆黒のオオカミ型ゾイド。もう一方は純白のテイラノサウルス型ゾイドだ。

漆黒の機体は〈ヤミヒメ〉。先日のミヤコノ・シティで戦ったコマンドウルフ・タイプ。純白の機体は〈シラヒメ〉。カグヤの愛機だが、その武装は彼女の知るものではない。詳細を確認する前に映像は消え、続けて声が聴こえた。彼女を呼ぶ声が。

気付くと本を閉じていた。

本の内容はまるで憶えていない。あるのは激突する二体のゾイドの映像と、自分を呼ぶ誰かの声だけ。

「……………」

何が何だか判らない。白昼夢を見ていたかのような感覚。

「……………これは何？」

彼女——カグヤ・イザヨイは疑問を口にした。

年齢は二十代前半だろう。断言を拒こぼむのは彼女の外見が特異だからだ。適当に切った様な長い黒髪はあちこちで長さが違っており、黒い瞳の右側は眼帯に覆われている。

更にカグヤの印象を異様なものに行っているのが服装だ。下は黒いストラックスに、スカートと思わせる黒いパレオ。上はドレスともジャケットとも取れない黒装束。どれもレースとフリルで過剰なまでに装飾ほどこが施されており、そのファッションはゴシックローリータを思わせる。

一種異様な娘だ。

だが、その場に居合わせた男は気にした風もなく、カグヤの質問に答えた。

「『預言者の黙示録』——私はそう呼んでいる」

男の本名をカグヤは知らない。出身・年齢・経歴もすべて不詳。ただ〈教授〉とだけ呼ばれている。だがカグヤにしてみれば呼び名さえあればそれ以上の情報は必要無い。

「……………それで、その本は何なの？」

「部屋を整理して見て見つけた。何故だか君に見せるべきだと直感的に思った……いや
思わされたと言わすべきか」

「……質問の答えになつてない」

無表情にカグヤは呟いた。常に焦点の定まらない様な虚ろな表情の娘だが、この時は
かりは多少の苛立ちを感じていた。

「〈教授〉に訊いても無駄だよ、カグヤ」

カグヤと〈教授〉の会話に割って入ったのは少女だった。見た目通りなら十二、三才く
らいの可愛らしい少女だ。鮮血を思わせる紅いショートカットと大きな瞳。黄色いヘアバ
ンドと、水色の薄手のコートが良く似合っている。

だが、見る者によつては少女の存在に違和感を持つかもしれない。どこか存在感が曖昧
で、少女という規格から外れているような感覚に襲われる。

フィーア。

それが少女の名前だ。

「……どうということ、フィーア？」

「その本を読むには資格が要るの。適合者じゃない人にはただの紙切れの束。普通なら手
をつける気にさえならないよ」

フィーアはそう言うのと無邪気に、しかし、どこか蠱惑的に嗤った。



〈教授〉曰く『預言者の黙示録』と呼ばれた本による不可思議な体験から三日、カグヤ達
は先日の戦闘による〈シラヒメ〉の損傷箇所を修理をする暇もなく、暗黒大陸テュルクへ
と移動した。

目的地はトロイヤ。ガイロス帝国発祥の地であり、そして〈大異変〉によつて
廃墟と化した、廃都。

カグヤを呼んだ『声』はそこを指定していた。そして、彼女が見た映像に興味を持った
〈教授〉が、輸送艇を都合してくれたのだ。

輸送艇を残し、カグヤとフィーアは〈シラヒメ〉にて目的地を目指し発進した。

「ねえカグヤ、装備を外しちゃってよかったの？」

サブ・シートに座ったフィーアが訊ねる。

〈シラヒメ〉——ジェノブレイカー・タイプと呼ばれるその機体は、その名に違わぬ純白
色で塗られている。純粋な戦闘用ゾイドとしては最高位にある機体だ。だが、本来あるべ

き背部の荷電粒子コンバーターと六連装スラスタは外されており、右腕部にのみフリー・ラウンド・シールドが支持腕アームによって装着されている。

現在の〈シラヒメ〉はシルエットとしては下位機種である〈シエノザウラー〉に近い。

「……いいよ。この方が機体が軽い」

応えたのは当然、パイロット・シートそうじゅうかんで操縦桿そうじゅうかんを握るカグヤだ。

現在〈シラヒメ〉はホバー走行で移動している。機体を浮かせる程の出力と機動性がテイラノサウルス型ゾイドの特徴のひとつである。

「確かに接近戦をするなら、こっちの方が取り回しはいいけど」

「……なにか不満なの？」

「別に？ 飛び道具は全部外はずさせたくせに、フリー・ラウンド・シールドだけは無理矢理付けさせる誰かさんの近接バカあきっぷりに呆あきれてるだけ」

「……どうせ使わないなら機体を軽くした方がいい」

「そう。ま、いいけどね」

言っても無駄と悟ってか、フィーアはそれ以上言葉にしなかった。

やがてトロイヤの景色が遠目に見えてくる。神殿のような巨大建造物だ。

「……………！」

カグヤの脳裏に映像が浮かんだ。『預言者の黙示録』を手を取った時に見たイメージ

——二体のゾイドが戦っている。

「カグヤ、レーダーに感あり。お出迎えみたいだよ」

フィーアの報告が聞えた時には、すでにイメージは消えていた。

「……やっぱり、あたしを呼んでる」

「また見えたの？ 例の映像？」

「……うん。あそこが目的地で間違いない」

「じゃ、早いとこ済ませちゃおう」

神殿が肉眼でも確認出来る距離に到達する。そこへ行かせまいとするかのように現れたのは、大量の小型ゾイドだった。

「……なに、あれ？」

「うわ、キメラボックスだ」

キメラボックス。

それは人工のゾイドコアを複数持つゾイドボックス——その発展型である。合成獣キメラの名が示す通り、複数の生物の特徴を備えた外見をしている。

「飛んでるのが〈フライシザース〉。トカゲみたいなのが〈ディプロガンズ〉」

フィーアが簡単に説明をする。

「でもって、それに指示を出してるのが〈ロードゲイル〉ね」

開発当初のキメラブロックスは、ゾイドとしての闘争本能が制御用プログラムを侵食してしまい、敵どころか味方にまで襲い掛かり、さらには他のゾイドを喰らっては突然変異を引き起こしてしまう事もあったため軍事的な利用価値は低かった。それらを遠隔統制するために開発されたのがガーゴイル型キメラブロックス〈ロードゲイル〉である。ヒトに近い四肢を持ち、背中には一対の羽根。右腕にはハサミ、左腕にはスパアを装備している。

五体の〈ロードゲイル〉と、その支配下にある五十機の〈フライシザース〉と〈ディプロガンズ〉の大部隊が展開している。

「……敵、かな」

「こつちを包围するように近づいてる。迎撃行為だと思っよ」

「……なら、突破する。エクス・ブレイカー展開。チャージング・ブレードも」

「はいはい。準備オール・オッケーだよ」

カグヤの指示通りにフィーアが〈シラヒメ〉の装備を展開させた。右腕部に装着されたフリー・ラウンド・シールドからは『カニバサミ』を思わせる一対の特殊チタン合金製の刃が、頭部にはツノを思わせる一本のブレードが現れた。

「……行くよ——〈シラヒメ〉」

主の号令と共に、〈シラヒメ〉が殺戮の咆哮を上げた。

白い機体が加速する。まずは至近距離にいた〈ディプロガンズ〉を踏み付けにし、左側に回りこんできた別の一体を蹴り飛ばし、更に迫り来る二体に左右の腕を飛ばして頭部を潰す。そして後方に回り込んできた〈フライシザース〉に掴んだ〈ディプロガンズ〉を投げつけて叩き落とす。更に迫り来る〈フライシザース〉の群れをエクス・ブレイカーで粉碎し、チャージング・ブレードで二刀両断にする。

瞬く間に十機近いキメラブロックスがスクラップに変わる。

だがそれでもキメラブロックスの群れは止まらない。次々に〈ディプロガンズ〉が〈シラヒメ〉に群がり、〈フライシザース〉が上空を旋回する。

それはまるで死肉に群がる異形の群体——終末戦争を思わせる異様な光景だった。



その光景を遙か高空から見下ろす人物が居た——否。正確に言えば、そこに居るゾイドの視覚情報を読み取っているというのが正しい。実際、高高度で滞空しているのは無人機

である。

〈レドラー〉に酷似した白と青を基調にしたドラゴン型の機体。

その名は〈ブラウリッター〉。

「〈アインヘリアル・システム〉、正常に稼働中。〈五重奏団〉、全機健在。キメラブロックスの損耗率十パーセント——」

〈ブラウリッター〉の目を通して、じぶや 眩くのは十代半ばくらいの少女だ。ショートカットの銀髪と澄んだ碧眼。へきがん 美しい少女だが、戦場を観察するその表情は驚くほど冷めている。

「何者でしょうか？ こんな所に用があるとは思えません」

キメラブロックスの群れに呑みこまれた白いジェノザウラー・タイプに見覚えは無い。

しかし、不思議と知っている様な感覚もある。

「まさかとは思いますが……ん？」

とつじよ 突如、閃光が走った。それはキメラブロックスの群がる戦場の中心から放たれた荷電粒子砲の光だった。閃光は数機の〈ディプロガンズ〉を巻き込みながら進み、後方に居た〈ロードゲイル〉の一体を消滅させた。

「〈三番機〉がやられました。残存機の指揮は〈一番機〉と〈二番機〉が代行。〈四番機〉と〈五番機〉は後方へ。合奏を〈四重奏団〉に移行」

少女は焦ることなく〈ブラウリッター〉へ——その統制下にある四体の〈ロードゲイル〉へ指示を送る。

〈アインヘリアル・システム〉——それは総数五十体のキメラブロックスと、それを統制する五体の〈ロードゲイル〉、更にそれを統括する〈ブラウリッター〉による兵器体系を意味する。

言わばたったひとりの指揮者による『ワンマン・オーケストラ 単身楽団』である。

指揮棒が〈ブラウリッター〉なら、それを振っているのがこの少女だ。

「行きなさい、荒々しく！」



キメラブロックスの動きが変わった。

恐らく指揮官機の一体がやられた影響だろうとフィアは察した。だがカグヤには伝えない。伝えたところで彼女の戦術は変わらないだろうから。

一体、また一体とキメラブロックスの数が減っていく。群がってくるそれらを、片っ端から〈シラヒメ〉が撃破する。

態勢を立て直すために荷電粒子砲を使ったが、本来、〈シラヒメ〉に飛び道具など必要ない。その全身が強力な武器と言えるのだから。

「……まだ足りない」

更に別の敵機を破壊する。壊せば壊すほどカグヤは自分の中の破壊衝動が満たされていくのを感じていた。

「……もつと……もつと来て……」

壊し、砕き、切断し、潰していく。

「……あたしに実感させて——生きてるんだって」

カグヤの隻眼せきがんに暗い光が宿っていく。虚ろだった焦点が一点に合わさって行き、思考もクリアになっていく。

「ねえカグヤ、残りも荷電粒子砲で一掃した方が——って、聞こえてないよね」

フィーアは完全にトランス状態イッってしまったっての相棒たんそくに嘆息しつつ、

「でもね、そういうカグヤが私は好きだよ」

そう呟つぶやいた。



「……そういう事ですか」

〈ブラウリッター〉を通して戦場スキヤンを走査し終えた少女は、ため息を吐いた。白いジェノザウラー・タイプスキャンの目的に気付いたのだ。

「『所持者』が来たようです。どうなさいますか、お嬢様？」

少女の問いかけ。それに応える声は聞こえない。

だが——

「判りました。彼女を招き入れます」

その声は事務的で淡々としている。

「〈アインヘリアル・システム〉、全機撤収カルマート。〈ブラウリッター〉、あなたも帰還しなさい」

「と」

そして——

「これでよろしいのですね、お嬢様？」

誰に言うともなく少女は口にした。やはりそれに応える声はない。

「彼女が……」

呟くと少女は来客を出迎える準備を始めた。

三機目の〈ロードゲイル〉を撃墜した時、変化は起こった。

〈シラヒメ〉に群がっていた全てのキメラブロックスの動きが一時停止すると、トローヤ神殿に道を開くように左右に散った。

「……なに？」

「『入れ』って言ってるんだよ」

訝いぶかしむカグヤにフィーアが応えた。

フィーアの言葉を証明するようにキメラブロックスの群むれはじつとこちらを見つめるだけで敵意を見せない。

「……………」

読みかけの本を取り上げられた様な表情のカグヤだったが、考えるだけ無駄と判断し、〈シラヒメ〉を神殿の手前に進ませた。入り口らしきものはない。すると——唐突に眼前の地面がスライドし、地下へと続く階段が現れた。

人間なら楽に通れるサイズだが、中型ゾイドでは無理そうだ。仕方なくカグヤとフィーアは愛機を残して階段を下りた。

階段を下りきった先にあつたのは薄暗い応接室だった。人間用のサイズのソファとテーブル。壁は本が納まった棚で埋められている。だがどれも長い間使われた形跡がない。それでいて放置されている訳でもない。

「誰か管理している人がいるみたいだね」

部屋を見回してフィーアが言った。

「……その誰かがあたしを呼んだ？」

手に持った『預言者の黙示録』と言うらしい本をカグヤは見た。やはりその装丁せうていには何も書かれていない。

そこへ——

「お待ちしております」

声と共に現れたのは十代半ばを思わせる少女だった。澄んだ瞳は碧眼へきがん。銀色の髪はショートカット。小柄で美しい少女だ。

だが——

「なんで、メイドさん？」

フィーアが疑問に思うのも当然で、少女は家事使用人の衣装に身を包んでいた。黒い

ワンピースに、白いフリル付きのエプロン。袖とスカートそで丈は短く、フレンチ・タイプに分類されるメイド服だ。だが、頭部にはホワイトブリムと角のような金色の髪飾りをしてる。

「この神殿の管理・維持をしています。イリアスと申します」

銀髪の少女——イリアスは優雅に一礼すると、カグヤの持つ本に視線を移した。

「あなたが『所持者』ですね。お名前をお聞かせ願えますか？」

「……カグヤ・イザヨイ。この子はフィーア。あたしを呼んだのはあなた？」

「私ではありません」

イリアスは首を横に振った。

「その質問にお応えするために、その本を見せていただけますか？」

言われるがまま、カグヤは本を渡した。

「……やはり、そうでしたか」

本を確認すると銀髪の少女は目を閉じ、語り始めた。

「かつて、一冊の本がありました。それにはこの世界の始まりから終わりまでが記述されていきました。名を『預言者の回顧録』と言います」

「……それが、この本？」

カグヤの質問にイリアスはまた首を横に振った。

「これはオリジナルの劣化コピーです。あなたはこの本で見えましたか？」

「……二体のゾイドが戦ってた。片方はあたしのゾイドだったけど、見たことの無い装備をしていて……それだけ」

「そうですか。あなたが見たのは恐らく未来でしょうね。この本の力はそれだけです。そう遠くない未来を断片的に見せる黙示録。回顧録オリジナルの劣化コピーでしかありません」

「そのオリジナルは今は無いの？」

これまで黙って話を聞いていたフィーアが疑問を浮かべた。

「それは……」

淡々としていたイリアスの表情に初めて動揺の色が浮かんだ。それきり彼女は口をつぐみ、場に沈黙が下りた。

「……その本が何だっただけは興味ない。ただ呼ばれた気がしてここに来た。無駄足だった？」

カグヤが思ったままと口にした。

「いいえ。きっと、あなたの望むものがここにあるのでしょうね。これを持って、もう一度あなたが見た映像を思い出してください」

そうやってカグヤに本を渡すと、イリアスは虚空へ向けて言葉を発した。

「イリアスの権限において〈ユグドラシル〉に接続。コード六六六」

すると中空にいくつもの表示窓が同時に開いた。それらに映し出されたのは設計図らしき図面とデータ、それから――

「〈シラヒメ〉と〈ヤミヒメ〉だね。これがカグヤの見た未来？」

戦う二体のゾイド。その映像を見てカグヤが首肯する。

「これは『バスター・クロウ』だね。こっちの図面とデータも」

「……バスター・クロウ？」

「そう。マグネーザーの技術を利用した爆砕兵器。〈バーサークフューラー〉用に開発されて、ほとんどのデータが失われているから開発は今では不可能って言われてたんだけど……この図面とデータがあれば造れるよ」

フィーアは興味津々といった様子でウィンドウを見て言った。

「これがあなたに必要な力なのでしょうね。近い未来にあなたはこの映像を追体験するはずですよ」

「……………」

イリアスの言葉にもカグヤは無言で映像に見入っていた。その武器は三枚の刃が三角形状に束ねられており、ドリルの様に回転している。それは時に基部を軸に展開し、三枚の刃を爪の様に振りかざす。見る者に恐怖を喚起させる凶悪なデザイン。

「……バスター・クロウ。あたしに必要な力――」

呟くカグヤの表情に恍惚としたものをイリアスは見た。



「そのデータは差し上げます。その代わりと言う訳ではありませんが、本はこちらでお預かりしますね。あまり人目に触れてよいものでもありませんから」

イリアスの言葉に異存は無いのだろう。フィーアが持参した端末を用いて、バスター・クロウのデータを記録したのを確認して、カグヤは『預言者の黙示録』を惜しげもなく差し出した。

「あっさり手放されるんですね。ごく近いとはいえ未来が見えるのですよ？」

「……言っただけでしょう。興味が無い」

「そうですか」

本を受け取りながら、イリアスが問う。

「——もし、自由に未来が見られるとしたら、あなたは見たいと思えますか？」
他意はない。単なる好奇心だ。

漆黒に身を包んだ娘がこちらに振り返った。その表情はやはり虚ろで何を考えているか判らない。

「……もしも選べる未来があったとしても、多分、あたしは何も選べない。だから、未来に興味も無い」

「もし、過去すら変えられるとしても？」

「……変えてしまったら、それはもうあたしの過去じゃない。無かった事になって出来ない」

「では、貴女は何を望むのですか？」

「………破壊——」

「——！」

あまりに無感情な声と瞳にイリアスの肌は粟立った。

「……この吐き気がするような世界が、あたしは嫌い」

「………」

「けど、ゾイドに乗っている時だけはそれが消える。破壊衝動があたしを満たしてくれる。だから壊すの——気持ちいいから」

もう話す事は無いとばかりにカグヤは背を向けて歩き出した。

「カグヤはああいう娘なの。気にしないで——ワイバーン」

カグヤには聞こえないであろう声で紅い髪と瞳の少女が意味深に言った。

「……あなたも、〈リントヴルム〉の力を過信されないように——〈E・O・S〉」
意趣返しとばかりに銀髪の少女も言った。

「え？ なんのこと？」

「いえ、独り言です。何でもありませんよ？」

「そ？ ならいいけど」

剣呑な空気が二人の少女の間に生まれたのも一瞬、すぐにそれは氷解した。
どちらからともなく笑みがこぼれる。

「また会えるかな、イリアス」

「はい。縁があればきっと、フィーア」



「——で、これが今回のお土産みやげか？」

帰還したカグヤとフィーアに渡された情報端末を手に取り、《教授》と呼ばれている四十絡みの中年男性は言った。

「バスター・クロークか。また物騒しろものな代物だな」

「……そう。空あいてる左腕ひだりにフリー・ラウンド・シールドの代わりに付けて」

「《教授》なら楽勝でしょ？ 次の出撃までお願いね」

カグヤに続いてフィーアが気楽に言った。

「簡単に言うがな、左右でバランスが違ちがうと色々いろと面倒めんどうだぞ？」

「そこは《教授》の技術を当てにしているよ」

「パイロットの技量ぎりょうもか？」

「そこはカグヤを信頼しんらいしてる。ね、カグヤ？」

「……問題無い」

「判わったよ。こんだけデータがあれば三日で出来る。《シラヒメ》の装備は本当に《シエノブレイカー》にしなくていいんだな？」

「……ええ。このままで」

カグヤの返事に《教授》が難しい顔をする。

「なにか問題なの？」

と、フィーアが訊きねる。

「いやな。この装備とスペックだと、もはや《シエノザウラー》でも《シエノブレイカー》でもなくなる。そうなると便宜的ていせきにでも別の機体名きたいなを付ける必要がある」

「《シラヒメ》じゃダメなの？」

「そりゃあ愛称あいしょうだ。この装備形態きぼうけいの名前なまえが要ひる」

《教授》がひとり難しい顔かほを続ける。

「……《シエノフューネラル》」

ぽつりと呟つぶいたのは意外いにもカグヤだった。

「『葬儀フューネラル』——か。いいんじゃない？ カグヤっぼくて」

「ふむ。了解りやうかいだ。それで登録とうろくしよう」

「じゃあ、作業さぎょうよろしく」

「ああ。期待きたいしておけ」

そう言うと《教授》はさっさとその場ばを後にした。恐おそらく徹夜てつやが続つくだろう。

「楽しみだね、カグヤ。新しい《シラヒメ》」

「……ええ、本当に」

過去など変えられない。

選べる未来など無い。

だから現在いまを壊す。

それが〈魔女〉の唯一の——願い。

第十二話

生きる事に理由は要らないという。

ただ生きたいと願えば、それだけで理由になるから。

ならば生きたいと思わなければ、死ぬのにも理由は必要無いのではないだろうか？

何もかもがどうでもよかつたのだと思う。

死への恐怖がないから生の喜びもない。

生への執着がないから死を恐れる事もない。

生きる事がわずら煩わしい。

生きたい？

それとも死にたい？

どちらでもない。

ただ現状への不満だけがある。

だが、世界などそうそう変わらない。

あるべくして世界はこのように形作られている。

それは否定のしようがない現実。

ならば壊すしかない。

それが一番簡単に判りやすい。

誰もが夢物語だと笑うだろう。

しかし、あたしはそう思わない。

それを成なすだけの力を得たのだから。

第十二話 アウエイクニング

眠りに就く度に、このまま目が覚めなければいいと思う。明日など来なければいい。そして目が覚める度に絶望する。また今日を生きねばならない。

えも言われぬ倦怠感が身体を侵す。

——憂鬱だ。

だから今日も不毛な遊戯に耽る。

枕元に置かれた、にぶく黒光りする鉄の塊を手取る——銃だ。

手馴れた動作で安全装置を外し、激鉄を起こす。拳銃ならではの短い砲身、その銃口を自分のこめかみに当て、静かに目を閉じ——引き金を引く。

——カチン。

しかし、弾丸が発射される炸裂音はない。激鉄が降りた濁いた金属音だけがむなしく響く。

当然だ。弾倉が入っていても、遊底を操作して初弾を薬室に送り込まねば弾は発射されない。

薬室に弾が込められていないのは判っていた。

だが、どれだけの人間が彼女と同じ行為が出来るだろうか。

もし弾が込められていたら？

次の瞬間には頭蓋骨を貫通し、脳漿を撒き散らして死ぬかもしれない。それが想像出来ないほど彼女は愚かではない。

いや、むしろ彼女はそれを望んでいる。

ひよっとしたら死ぬるかもしれない——そんな淡い期待を抱いている。

「……………」

愛用の銃（ベレッタ）を無造作に床に落とす。

自身のくだらない行為に苛立つ。

「……………どうして生きてるの？」

こんなことに意味は無い。

こんな安易な死に意味は無い。

彼女が望んでいるのはこんな死ではない。

「……どうして死ねないの？」

——判らない

何故生きているのか判らない。

曖昧な存在感。

空虚な現実感。

無力な虚脱感。

こんな思いをしてまで生きなければならぬのであれば、この世界は地獄だ。

「……………」

再び身を横たえる。このまま眠ってしまおうかと彼女が思った時——

『——カグヤ！ おはよー』

場の空気を根こそぎ崩すような深刺はつらつとした少女の声がスピーカー越しに響いた。部屋の入り口に設置してある来客用のインターホンからだ。

「……………」

カグヤと呼ばれた娘が時計に目をやる——もう正午をいくらか過ぎてている。

仕方なくといった表情で、カグヤがインターホンの相手に応えた。

「……フィーア、何？」

『何、じゃないよ。今日の昼過ぎには〈シラヒメ〉の再テストをするからって言うておいたでしょ？』

「……………」
「うん、そうだったね。これから整備場へ行く」

『早くね。〈教授〉が徹夜明けでハイになってるから』

言う事だけ言うと少女は通話を切った。

「……………」

薄暗い部屋に、しんとした静寂が戻る。

もしかしたら、この部屋の外の世界はすでに滅んでしまっているのではないか——そんな事を考える。そうであれば、どれだけいいかと。

「……………」
「あ、起きないと——」

眩つぼやき、カグヤはベッドから立ち上がった。



身支度を終えたカグヤ・イザヨイは姿見に自分の姿を映し、その容姿を確認した。

そこにいるのは二十代前半くらいの若い娘だ。適当に切った様な不揃いな髪はあちこちで長さが違っており、艶やかな漆黒。瞳の色も同じく黒いが、右目は眼帯に覆われていて見る事は出来ない。肌は白く、身体は病的なまでに痩せている。

美人だろう。

だがその虚ろな表情と暗い雰囲気が、周囲に彼女の美貌を気付かせ難いものになっている。特に感慨もなくカグヤは鏡に映った自分を見つめ続ける。

「……おはよう、あたし」

にこりと微笑む。

だが、鏡に映る自分は笑っていない。

「……………バカみたい」

呟き、部屋を出る。

「おはよう、カグヤ！」

廊下でカグヤを迎えたのは年の頃なら十二、三才。鮮血を思わせる紅い髪と瞳の少女だった。

「……待ってたの？ フィーア」

フィーア——それが少女の名前だ。

可愛らしい表情と不自然なまでに整った容姿。天真爛漫な笑みには、どこか蠱惑的なものを感じる。

ちぐはぐな、何かが間違っているのにそれが何か判らない。そんな印象を抱かせる少女だ。

「待ってちゃダメだった？」

少しふて腐れた様にフィーアはカグヤを見上げた。カグヤはそれほど長身と言う訳ではないが、フィーアの小柄な背丈だと、やはり見上げないと視線が合わない。

「……そうは言っていないけど」

何故この少女が自分を事あるごとに構おうとするのか、カグヤには判らない。だが、一方的とも言える好意を自分に寄せてくるフィーアの存在を疎ましいとは思わなかった。

「ならいいでしょ？ 私とカグヤはパートナーなんだから」

パートナー。

この言葉をフィーアは多用する。それが自分達を繋げる絆であるかの様に。

「……そうだね。そうかもしれない」

「そうそう」

同意が得られた事が嬉しいのか、満足げに紅い髪と瞳の少女は頷いた。母親に褒められた子供の様に満面の笑みを浮かべた姿は、歳相応の少女に見える。

「……ねえ、フィーア。手伝ってくれる？」

「うん？ なにを？」

焦点の定まっていない視線を虚空に向け、無表情に呟く漆黒の娘に、紅い少女は訊き返した。

「……………世界の終わりを——」

ぼつりと、カグヤの口から紡がれた言葉は、フィーアの予想通りのものだった。だから——

「いいよ。カグヤがそう望むなら」

カグヤの視線がフィーアに向いた。やはりその表情には感情というものが感じられない。だが、それでも——

「だって私は——そういうカグヤが大好きだから」

紅い少女は屈託なく言った。邪気の無い笑みで。

「……そう」

だからカグヤも笑顔を返した。上手く出来ていたかは自信が無かったが。



純白に彩られたティラノサウルス型ゾイド——通称〈シラヒメ〉。

正式名称は〈ジエノフューネラル〉という。

〈虐殺竜〉とも〈魔装竜〉とも違う名前を与えられた理由はその武装にある。〈ジエノザウラー〉の機体に、右腕には〈ジエノブレイカー〉のフリー・ラウンド・シールド。

左腕には〈バーサークフューラー〉のバスター・クローを装備している。

左右非対称のシルエットは歪かつ攻撃的な印象を見る者に喚起させる。

〈シラヒメ〉の白い機体が駆ける。ティラノサウルス型特有のホバー走行で、地上数十センチ上空を滑る様に突き進む。

「目標はアイアンキング・タイプが五機。制限時間は無し。勝利条件は隊長機の撃破だけだ」——とつぶさる。――

〈シラヒメ〉のコクピット、そのサブ・シートに座るフィーアが訊ねた。

「……全機撃破。せつかくの実戦テストだもの」

当然という様にメイン・シートに座るカグヤは応えた。普段どおりの無表情だが、戦闘を前に、やや高揚こうようしている様にも感じられる。

「だよね。せつかくリミッターの限定解除許可ももらったし、〈LDS〉の能力開放もしてみろ？」

「……待機動作状態アイトリングで充分だよ。まだ必要無い」

「りよーかい。もうすぐ敵の射程圏内に入るよ。地対地戦術ミサイルに『用心』」

歌う様に楽しげにフィーアが口ずさむ。

やがてその少女の身体から、ぼんやりとした紅あかい光があふれ出す。

「……………はあ」

カグヤはこの感覚が好きだ。背中に暖かいものを感じると共に、〈シラヒメ〉にも力が漲みなぎって来るのが判る。

「……………いくよ——〈シラヒメ〉」

——グウオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

〈シラヒメ〉が吠ほえた。

カグヤの声に応える様に。その内に秘めた破壊衝動を露あらわにする様に。

やがてレーダーが、こちらを補足した大型ミサイルを感知した。数は十二基。

「……荷電粒子砲で撃ち落とす」

「了解。迎撃モード、いけるよ」

カグヤの指示にフィーアが応える。接近戦での感覚的な操作にはずば抜けたセンスを発揮するカグヤだが、火器管制装置FCSや各種レーダーやセンサー、機体状況のチェック等は全てフィーアが担当している。カグヤはただ引き金を引くだけだ。

〈シラヒメ〉が両脚のアンカーを下ろし機体を地に固定する。各部の冷却システムが連動し、大きく開かれた口内から荷電粒子砲の砲身が現れる。

まだミサイルは肉眼では点としか認識出来ない距離だが、既に〈シラヒメ〉は標的を捉えている。カグヤが荷電粒子砲の引き金を引いた。

青白い光の奔流ほんりゅうが虚空こくうへ走る。更に〈シラヒメ〉が首を右に振り、扇状おうぎに荷電粒子を照射していく。本来、ジェノザウラー・タイプは荷電粒子砲の照射中に向きを変える事は出来ない。荷電粒子砲の反動に機体が耐えられないからだ。

しかし、〈シラヒメ〉は荷電粒子砲の威力の調節と、固体特有の高出力によって、それ

を可能としていた。

荷電粒子砲の軌跡^{きせき}をなぞる様に、空に爆光が咲いていく。ミサイルが上空で撃破された証拠だ。

「全ミサイル撃破。そろそろ本体も見えてくるよ」

「……もう見えてる。アイアンコング・タイプが五機」

〈シラヒメ〉の望遠カメラが捉えた映像には、五つの巨体^{とど}が映し出されていた。全高十七メートルのゴリラ型ゾイド〈アイアンコング〉。

かつてヘリック共和国の象徴ゾイドであった〈ゴジュラス〉の無敵時代を終わらせた、ゼネバス帝国の大型ゾイドである。全天候・地形での活動を可能とし、高い格闘戦能力と砲撃戦能力を持ち、なによりその扱いやすさから、〈アイアンコング〉こそ最高傑作ゾイドであるという呼び声も高い。

そんな機体が五機というのは、〈大戦〉後である現在では破格の戦力と言える。

五機のアイアンコング・タイプは〈シラヒメ〉の荷電粒子砲を警戒してか、広く展開している。二本の足と長い腕を使い、四足獣の様に駆けて来る。こちらを包囲するつもりだろう。

「……赤いのがいる。『PK型』？」

ひときわ目立つ赤色に染められた〈アイアンコング〉を見つけ、カグヤが〈シラヒメ〉のデータバンクをさんしょう照合した。照合結果は〈アイアンコングPK〉とある。

「プロイツェン・ナイツ^Pの略だよ。昔の戦争で、プロイツェンって人の親衛隊に配備されたエリート専用のスペシャル機。あれが隊長機だね」

フィーアが付け加える。

確かに赤いアイアンコング・タイプ——〈アイアンコングPK〉はカラーリングだけでなく、装備も他の機体と違っている。通常型が右肩に六連装ミサイル・ランチャー、左肩に十連装ロケット弾ランチャーを装備しているのに対し、『PK型』は右肩のビーム・ランチャー、背部のバーニア・スタビライザーを始め、過剰なまでの武装が施されている。フィーアの言うとおり指揮官機だろう。徐々に距離を縮めてくる包囲網には加わらず、後方に待機している。

「どつちみち、取り巻きから墜^おとさないダメだね」

「……バスター・クロー、使うよ」

「いいよ。激発^{トリガー・ツォイス}音声は憶えてるっ」

「……〈もしくは世界の終わり〉——」

ぽつりとカグヤが呟^{つぶや}いた。

トリガー・ウォイス
「激発音声と呼ばれるそれは、強力な武装の暴発を防ぐための安全装置を解除する手段である。」

「……〈ワールド・エンド〉——デストラクション」

ガキイン——という金属音と共に、バスター・クロウを構成する三枚の刃が展開し、巨大な三角形を形成する。それらが基部を軸に回転し、再びドリル状に集束される。

〈ワールド・エンド〉——それがバスター・クロウに与えられた名前だ。世界を壊すために与えられた新たな力。破壊の爪^{ツメ}。

「全武装オール・オッケー。いけるよ、カグヤ」

最終確認を行ったファイアが言った。

「……了解。〈シラヒメ〉——」

愛機の名を呼ぶ。

白い〈竜葬^{ジエノフェューネラル}姫〉が吠える^ほ。

右腕にはエクス・ブレイカー。

左腕にはバスター・クロウ。

頭部にはチャージング・ブレード。

全ての武装を展開して、〈シラヒメ〉が駆けた。



『コング2よりコング1へ、全ミサイル撃破されました。荷電粒子砲です』

〈アイアンコングPK〉のコクピットで、男は静かに部下からの通信を聞いていた。彼が

このアイアンコング・タイプで編成されたチームで、コング1のコール・サインを持つ指揮官だ。

「コング1より全機へ。荷電粒子砲の連射は無いと思われるが、警戒はしておけ。予定通

り包囲殲滅^{せんめつ}でしとめる」

『コング2、了解しました』

『コング3、了解』

『コング4、了解』

『コ、コング5……りよ、了解です』

それぞれに返答を返す部下からの応答を聞く。通信機越しでも、彼らがどんな表情をしているかは判る。

「コング1よりコング5へ。焦るな。訓練通りにやればいい」

『——は、はいッ!』

コング5と呼ばれた者が慌てて応えた。彼はこれが初の実戦となる。緊張するなという方が無理だろう。

『フォローはしてやるから、気楽にやろうぜ』

『コング4、お前は少しくらい緊張しろ』

通信に割って入ったコング4を、コング3がたしなめた。

『へいへい。コング4、自重しなす』

『コング2よりコング5へ。フォーメーションの変更は可能だ。援護に下がってもいいんだぞ』

『だ、大丈夫です。コング5、やれます』

『ならいい。——コング2から3、4、5へ。目標を包囲次第、全弾発射。相手はジェノブレイカー・クラスだ。出し惜しみは無しでいく』

部下達のやり取りを頼もしく思いながら、コング1が最後の指示を出す。

「目標が見えた。全機、戦闘開始だ!」

コング1の号令のもと、4つの『了解』が続く。

彼等の目標は〈Z O I T E C〉社の新型ゾイド〈ゼノフューネラル〉だ。白いジェノザウラー・タイプの機体に、フリー・ラウンド・シールド。そして失われた技術であるバスター・クロウを装備している。頭部にはチャージング・ブレードも確認出来る

「『葬儀』か……縁起の悪い名前だ」

コング1は独りごちた。

勝算はあった。

いかに強力なゾイドとて、相手は一機。しかもこちらの編成はアイアンコング・タイプが五機だ。少なくとも互角には戦えるだろう——と。

しかし、コング1の希望はあつけなく砕かれた。

まず飛び道具が通用しない。

六十発を越えるロケット弾とミサイルによる十字砲火をたやすく回避し、避け切れなかったものもバスター・クロウから展開されるEシールドに防がれた。

だがそれでも、コング1のビーム・ランチャーの援護を受けつつ、コング2から5は撃ち尽くした武装を強制排除し、格闘戦を挑んだ。

しかし——

『うわああああああああああああ——ッ!』

まず最初に響いたのは、コング3の悲鳴だった。

《ジェノフューネラル》の右側面に飛び込んだコング3の《アイアンコング》が、一瞬でその両腕を切断され、エクス・ブレイカーで首を挟まれ宙吊りにされた。更に《ジェノフューネラル》は、コング3の機体を背後から迫っていたコング2に投げつけ、動きを封じたその背後に回りこみ、背部からコンバット・システムを撃ちぬいた。

瞬く間に二機が撃破された。

『——ちッ。コング5、同時に仕掛けるぞ。そのまま挟み込め!』

『りよ、了解!』

《ジェノフューネラル》の左右から、二機の《アイアンコング》が迫る。格闘兵装でもあたる太い腕——ハンマー・ナックルを振り下ろす。

だが、《アイアンコング》のパンチが届くより速く、《ジェノフューネラル》が両腕を交差し、身を低く下げた。左右の武装を繋ぐ支持腕アームが限界まで伸び、右のエクス・ブレイカーがコング4の機体の首を切断し、左のバスター・クロウがコング2の機体の胸部に突き刺さった。

一瞬の間を置いて、ほぼ同時に二機の《アイアンコング》がその場にくずおれた。

「……まさか、四機の《アイアンコング》が数秒で——」

愕然がくぜんとするコング1。

だが、現実逃避する暇ひますら彼には与えられなかった。《ジェノフューネラル》がこちらに向かっていている。

「——くッ」

追加された左腕のグレネード・ランチャーとパルス・レーザー・ガンを撃ち放つ——当たらない。

更にロケット弾とビーム・ランチャーも斉射して弾幕を張るが、爆煙を突破した《ジェノフューネラル》には傷ひとつ付いていない。

「バケモノめ……!」

コング1は戦慄せんりつした。

勝てない。本能が告げている——逃げろ、と。

それでも。

「せめて一撃だけでも——!」

外付けの武装をバージし、追加されたバーニアを全力で噴かす。軽くなった《アイアンコングPK》の赤い機体が加速する。

その剛腕が《ジェノフューネラル》の頭部を捉とらえたかと思つた瞬間——

「——!」

〈ジェノフューネラル〉の機体が紅く染まった。

「カグヤ、せっかくだから〈LDS〉の解放テストもしておこう？」

残る敵機はPK型二機だ。たいした脅威には感じられないが、テスト相手にはちようどいいかもしれない。フィーアの提案にカグヤはそう考え、

「……了解。〈LDS〉能力開放——アウエイクニング」
ぼつりと呟いた。

次の瞬間、〈シラヒメ〉の機体が紅く輝いた。フィーアの身体から出ている紅い光と同じ粒子を撒き散らしながら、その機体が加速した。

ドクン——と、鼓動が高鳴る音を聴いた気がした。〈シラヒメ〉の破壊衝動が高まり、その感情がカグヤに流れ込む。異物が身体に入り込む不快感と快感が同時に来る。

「……………くう——」
思わず声が漏れる。

「……………いくよ——〈シラヒメ〉」
残像すら残すスピードで、こちらに疾駆する〈アイアンコングPK〉のハンマー・ナツクルを軽々とかわし、相手の懐に潜り込む。

〈シラヒメ〉のチャージング・ブレードが青白い燐光をきらめかせる。
「……………〈ヴァリアブル・スライサー〉——」

カグヤの眩く様な激発音声と共に〈シラヒメ〉が頭を振り下ろすと、目の前の〈アイアンコングPK〉の胸部に袈裟斬りの一閃が刻まれた。一瞬遅れて、〈アイアンコングPK〉の上半分が斜めにずれ落ちた。

「……………」
その様を、カグヤは無感情な隻眼で見つめた。
思う——こんな風に世界も壊せればいいのに。

『——その願い、叶えてあげようか？』

突然——『声』が聴こえた。

「……………だれ？」

しかし、カグヤの問いに返事は無い。

幻聴かとも思ったが、その声ははっきりとカグヤの耳に残っていた。

「……………」

もう一度、心の中で問いかける。だがやはり返事は無い。

「どうしたの、カグヤ？」

フィーアには聴こえなかったのだろうか。何事も無かったように小首を傾かしげている。

「……………何でもない。機体に異常は？」

「無いよ。〈LDS〉の能力解放も問題無し」

「……………そう。ならいい」

『声』の事を話そうかとも思ったが、なんとなく躊躇ちゅうちよした。

『——おつかれさん。テストの結果は良好だ』

〈シラヒメ〉のココピットに通信が入った。通信映像に映っているのは四十絡みの中年だ。

白髪混じりのぼさぼさ頭に、くたびれた白衣。『技術者』という言葉が全てを物語っている。そんな男だ。

〈教授〉。

それが、カグヤ達の所属するZOITECKソイテック不正規技術開発部門——通称〈ミラージュ〉の最高責任者の呼称だ。本名・出身・経歴は全て不詳。ただ〈教授〉とだけ呼ばれている。

「〈教授〉、良いデータが取れた？」

『ああ。ただ、ちよつと気になる点もある』

フィーアの問いに、〈教授〉は答えを濁じらせた。

『バスター・クロ——いや、〈ワールド・エンド〉か。なんというか……………まだ威力が出るはずなんだよな』

「……………どうのこと？」

〈教授〉の言葉にカグヤが反応した。

『〈LDS〉の能力解放時の出力にまだ余裕があるんだよ。クロー自体の材質交換が必要になるが、その場合、理論上は〈ワールド・エンド〉に突破出来ない防御手段は存在しないだろうな』

「今の状態で全力でやったら、〈ワールド・エンド〉の方がもたないってこと？」

『まあ一回の全力稼動でおしゃかだな』

「……………一回なら使えるのね」

カグヤの口調が微妙に変わった。

『逆説的にはそうなるな。それこそ、地殻に影響を与えて惑星破壊すら可能かもしれん』

〈教授〉の口元が不敵に笑う。

暗あんに何かを示唆しそするように。

「……そう」

カグヤは、やはりぽつりと、それだけ眩くらいた。

第十三話

『何故、生きる』？

『何故、戦う』？

ヒトは不思議だね。

そんな当たり前の事を考え、悩み、苦しむ。

僕には判らないよ。

僕達はそんな事に悩んだりしない。

ただ本能のおもむくままに戦い、そして生きる。

これが『知恵』を持ってしまったヒトと、『鋼の身体』を持った僕達の決定的な差なのかもしれないね。

違うモノ同士は判りあえない。

違っているが故に判りあえず。判りあえないが故に違っているのだから。

けど僕は君と出逢った。

君を理解したいと思った。

君の願いを叶えたいと願った。

——君に知って欲しい事があるんだ。

第十三話 魔女の所以

惑星 Zi におけるゾイド関連企業のトップである〈Z O I T E C〉社。そこに、表向きには存在しない部隊である Z O I T E C 不正規技術開発部門——通称〈ミラージユ〉がある。

責任者である〈教授〉と数名のスタッフで構成されるそれは、文字通り公には出来ない・存在しない技術の研究・開発を行っている。

いつの世もヒトは高みを目指す。

より高く。より多く。より強く。

『やるべきかどうか』は二の次で、『出来るかどうか』だけが問題視される。

ヒトはそれを重ねることで文明を発達させ、代償に罪を背負ってきた。その最たるものが兵器だ。

いかに効率良くヒトを殺せるか——究極的にはそこに行き着く。

そんな研究を行う者達にまともな道德観念や倫理観など期待出来ようはずもない。判つていても止められない。好奇心という名の知性が理性を殺す。

所詮はヒトも動物でしかない。『進化したサル』——まさにその通りだ。

故に彼等は様々な蔑称へつしやうで呼ばれる。

『死の探究者』。

『知性あるヒト殺し』。

『マッドサイエンティスト』。

以下、諸々もろもろ。

そんな不名誉な称号を与えられた彼等の中にあつて、一際異彩ひとまわを放つ呼び名を持つ娘が居た。

カグヤ・イザヨイ——通称〈魔女〉。

〈ミラージユ〉における唯一のゾイド乗りである。

通常、ゾイドと乗り手には相性あしやうがある。相性が良ければゾイドはカタログ・スペック以上の能力を叩き出す。逆に言えば、相性の悪い組み合わせだと、基本性能以下の実力しか発揮出来できない。

だが、カグヤにはこの常識が適用されない。彼女はどんなゾイドであろうとその機体を

完全に——いや、それ以上に乗りこなす事が出来た。

カグヤが搭乗したゾイドは例外なく凶暴化し、しかし彼女の存在を受け入れる。破壊衝動を露あらわにしながらも、理性を失わないのだ。

故ゆえにカグヤはこう呼ばれた。

『ゾイドを惑わす魔性の女』——〈魔女〉と。



正式名称〈ジェノフューネラル〉。

愛称は〈シラヒメ〉。

ジェノザウラー・タイプに分類されるそのゾイドが、あらゆる装甲と武装を外され、野生体に限りなく近い状態で整備場に居た。

周囲にヒトの気配は無く、〈ミラージユ〉のスタッフは全員、別室で状況をモニターしている。

〈シラヒメ〉のコクピットに居るのは、ゴシックロリータの衣装に身を包んだ娘だ。

年齢は二十代前半。色白の肌きに、華奢みやしやな肢した体。適当ふさわに切った様な不揃ふぞろいな長さの髪は

漆黒。左の瞳は黒く、右目を隠す眼帯も黒い。

娘——カグヤ・イザヨイの外見的特徴を表すならこんな処ところだろう。

美しい娘だ。

だが、その表情は虚うつろで、雰囲気も暗い。好きこの好んで彼女に声をかける男は、そう居まい。

ぼんやりとした表情のまま、黒い瞳を虚空こくうに向けている。

「……………」

こうしてコクピットに居ると落ち着く。絶対的な力が自分を護まもってくれている様な気持ちになる。出来るなら操縦そうじゆう桿かんを握にぎって、機体を暴あれさせたくなる。

だが、それが今は叶わない。

本来ならばカグヤの後ろに居るはずの紅あかい髪と瞳の少女が、今は居ない。

〈シラヒメ〉は〈LDS〉と呼ばれるシステムに、その存在を依存している。それを制御する少女の存在無くして、〈シラヒメ〉は本来の力を発揮する事が出来ないのだ。

『——どうだ、カグヤ？ 気分は？』

通信機を介して、男の声と映像が〈シラヒメ〉のコクピットに伝わる。

年の頃なら四十前後の中年だ。白髪交じりのぼさぼさ頭。よれよれの白衣を身に纏っている。

〈教授〉。

〈ミラージュ〉の最高責任者である彼は、ただそう呼ばれている。

「……特に変わらない。けど、少し背中がさびしい」

〈教授〉の問いかけに対し、無表情にカグヤは応えた。

『そいつはフィーア本人に言ってやるんだな。喜ぶぞ』

フィーア——本来はカグヤの後ろの席に居るはずの少女の名前だ。

四六時中カグヤの側に居る印象が強いため、居ないと、それはそれで物足りないものを感じる。

「……………」

そんな感情を持つ様になったのは何時からだろうか。フィーアと初めて出会ってから、まだ半年と経っていない。それが何時の間にか、一緒に居るのが当たり前になっていた。

「……フィーアは、どうしてる?」

『眠ってるよ。検査の結果は異常無しだ。お前さんの適合テストが終わる頃には目覚めるだろうよ』

「……そう」

何故そんな事を訊いたのだろうか。話の流れか。本心からフィーアを気にかけてのか。自分でもよく判らない。

『さあ、テストを始めよう。まずは通常起動からだ』

「……了解。〈シラヒメ〉起動開始」

これから行われようとしているのは、なんという事の無い起動実験だ。前述の通り、〈シラヒメ〉はフィーアの存在を前提に調整されている。しかし、今回の様にフィーアがココピットに居られない状況は今後もあり得る。だから、フィーアの存在無しで、カグヤがどこまで〈シラヒメ〉を扱えるのか調べておく必要がある。

それが、これから行う適合テストだ。

『〈シラヒメ〉の起動を確認』

『機体・システム共に問題は認められず』

『プログラムB29からD51までクリア』

『パイロットのバイタル確認。こちらも異常無し』

矢継ぎ早に、別室に居るスタッフの状況報告が入るのをカグヤはぼんやりと聞いていた。

『問題は無いようだな。続いて〈LDS〉を最低レベルで解放する』

責任者である〈教授〉が指揮をとる。

「……了解。〈LDS〉能力限定開放——アウェイクニング」

カグヤの抑揚の無い言葉がコクピットに響く。設置された音声入力装置が働き、〈LDS〉が開放された——その時。

——ドクン。

鼓動の様な音が聴こえた。

そしてコクピットが真っ赤に染まり、
アラート 警告音が鳴り響いた。



——グウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！

けたたましく鳴る警告音と共に、
猛々しいケモノの咆哮が轟いた。

〈LDS〉の開放と同時に、〈シラヒメ〉がすさまじい叫び声を上げたのだ。

「どうなってる!? 状況を報告しろ！」

別室で状況をモニターしていた〈教授〉が言った。彼にしては珍しく事態に困惑している。

「判りません！ 完全に状況不明！」

「コクピット内もモニター出来ません！」

「〈ジェノフューネラル〉のゾイドコアの異常活性化を確認！」

オペレーター達によって、次々に報告が届くが、状況を判断出来る要素は少ない。

「カグヤのバイタルは!？」

「バイタル確認！ 生きています……しかし——」

報告が不明瞭に途切れる。

「しかし何だ!？」

「カグヤの自我境界面が融解しています。このままでは、彼女の個体生命が維持出来ません！」

「……〈シラヒメ〉がカグヤを取り込もうとしているのか？」

最悪の可能性を口にし、〈教授〉は息を飲んだ。

どこまでも自分が広がっていく感覚。

自分という存在が拡散し、周囲とひとつになっていく。

——気持ちいい。

なにもかもが満たされていく。

苦痛も不安も憂鬱も——あらゆる事がどうでもよくなってくる。

この上ない全能感が心を支配する。

もう戻りたくない。

「——カグヤ」

ふと自分を呼ぶ声に気付く。

「カグヤ」

不思議な声だ。母性を感じさせる甘い響きと、父性を感じさせる優しさがある。

目を開く。もう戻りたくない。何も見たくなかったはずなのに。

「おはよう、カグヤ」

目を開いたカグヤの前に居たのはヒトだった——いや、正確にはヒトの姿をした何かだ。

「……あなた、だれ？」

カグヤの問いに、目の前の人物が苦笑するように薄く笑った。

その容姿は中性的で、男女の区別がつかない。ただ、どちらであれ美しい事に変わりはない。艶のある白い髪は肩にかかる程度の長さ。オレンジ色の瞳は穏やかな色^たを湛えて
いる。

服装はカグヤのものに近いゴシックパンク系で、体格からも性別が判断出来ない。

「判らないかな？ 君とは何度も逢っているよ」

声の主が優しく微笑^{ほほえ}む。その声も男声にしては高く、女声にしては低い。やはり中性的で男女の区別が難しい。

「……あなた、だれ？」

もう一度訊ねる。

カグヤの問いに、目の前の人物は芝居がかった仕草で肩をすくめた。

「こうして会うのは初めてだからね、無理もない」

そうしてカグヤに恭しく一礼し、言った。

「――僕はシラヒメ。初めまして、愛しの我が主よ」

わずかな沈黙が場を支配した。

「……シラヒメ？ あなた、男だったの？」

やや困惑気味にカグヤは訊ねた。

本能的に判る。『彼』は本当の事を言っている。

「ゾイドに性別は無いよ。だから正確には『男性格』というべきかな」

彼――シラヒメと名乗った青年は、やはり中性的な穏やかな笑みを浮かべたまま言った。

「……ここはあなたの中なの？」

「そう、理解が早いね。僕達ゾイドの記憶装置には、空き領域というデータの余剰空間があるんだ。ここは仮想空間。僕達はそう呼んでいる」

「……………」

「今、こうしている僕は、君と話をするための対人インターフェイス。仮想人格とでも言うのかな。この空間もそうだ。君のために用意したんだよ」

そう言ってシラヒメは両手を広げた。芝居がかった仕草や言い回しは基本仕様らしい。

周囲を見回すと壁紙から照明、テーブルセットまで、カグヤの好みを知り尽くした様な

ゴシック調に統一されている。

「気に入ってもらえたかな？」

「……あなたの容姿も、あたしが望んだ結果なの？」

「そうだよ。君が望んだから僕はこうして存在している。君が願う事。君が欲しい物。ここでなら全てが思いのままだ」

慈しむ様な優しい声がカグヤの耳朶をくすぐる。官能的なささやきだ。

このまま全てを委ねてしまいたくなる。

しかし――

「……違っ」

「ん？」

カグヤの中で何かが叫ぶ。

自分が望んだのは、こんな世界ではない。

「……いつか言ったわね。あたしの願いを叶えてくれるって」

「言ったね。世界を壊してしまいたい——君の願いを叶えると」

「……あたしは、こんな都合のいい世界が欲しかった訳じゃない。本当の世界を壊したいの。あたしが願うのは、それだけ」

困った子供を見る母親の様な表情をして、シラヒメは何度目かの苦笑を浮かべた。

「ここならどんな願いも叶う。もう悩む事も、苦しむ事も無い。なのに何故、本当の世界に固執するんだい？」

「……………」

「それは君がまだ、世界に絶望しきっていないからだ。無意識のうちに希望を抱いている。壊してでも何かが変わる事を願っている——違っかい？」

「……だとしたら？」

「君は正しい」

オレンジ色の瞳がカグヤを見つめる

「求め、抗う事こそ、生命の本質だ。君は間違っていない」

「……それが世界の終わりでも？」

「この世界はたくさんの願いや祈りで出来ている。君の思いが強ければ、世界はそれを受け入れる」

「……あたしの、思い」

ぽつりと呟くカグヤに眼差しを向けたまま、シラヒメが続ける。

「君の願いを叶えると言ったのは本当だよ。ほとんどのヒトはまだ気付いていない様だけど、この世界はとっくに限界を迎えているんだ。僕達が〈バースト・ポイント〉と呼んでいる場所がある」

「……〈バースト・ポイント〉？」

「そう。かつて起こった〈大異変〉と、半世紀前の〈大戦〉の傷跡……この惑星はもうボロボロなんだ」

遙か以前の惑星Z-iには三つの月があった。その一つに彗星が衝突し、砕けた月の破片が降り注いだ。

それが〈大異変〉だ。

当時、決戦を目前にしていた二大国の戦争はうやむやのまま停戦状態となり、大陸は異常気象に見舞われたという。

それに加えて、半世紀前の〈大戦〉で使われた大量破壊兵器の存在が決定打となった——シラヒメはそう語った。

「その結果、今の惑星Z*i*には地殻が脆もろくなった場所がいくつか存在する。それが〈バースト・ポイント〉。そこに最大出力の〈ワールド・エンド〉を撃ちこめば、この星は崩壊する——まさに世界の終わりだ」

美貌の青年はそこで言葉を切った。

「……どうして、そんな事を教えてくれるの？」

世界の終わりが来れば、ゾイドとて生きてはいられない。なのにシラヒメの語り口調は一切の曇くもりが無い。それがカグヤには不自然に感じられた。

「それはね、君が好きだからだよ——カグヤ」

「……………」

「本当だよ、嘘じゃない。僕は君が愛おしくて仕方が無い。もしも僕がヒトだったら——そんな事すら夢想するほどにね」

「…………どうして？」

「君はゾイドに愛されるヒトなんだよ。君に関わった全てのゾイドが君を好きになる。君の願いを叶えたいと思う。君の『壊してしまいたい』という想いに応えようとする。だから君が乗ったゾイドは凶暴化する——僕を含めてね」

「……………」

「君は〈魔女〉なんかじゃない。僕らにとっては〈女神〉なんだよ」

シラヒメの右手が、無言のカグヤの頬ほおをそっとなでる。

「それを君に知って欲しかった。この世界は君を否定なんてしていない。だから——」
だから。

「もう一度考えてみて欲しい。本当に世界の終わりを望むのか」

「…………あたしは——」

「おっと、もう時間だ。残念だけど、楽しい時間はこれでお終しまい。君を待っているヒト達が呼んでいるよ」

「……………」

途切れてしまった言葉。だが、不思議と苛立ちは無い。

「最後にもうひとつだけ——僕は君に相ふさわわしいゾイドかな？」

「…………あなた以外、だれがあたしの願いを叶えてくれるの？」

遠まわしな回答。素直に認めてしまうのは、何か癪しやくだった。

「そうだね。じゃあ、これは契約の証だ」

そう言うとシラヒメは、カグヤの白く華奢な手を取り、その甲に軽く口づけをした。

「本当は唇がよかつたんだけど、それは後が怖いからやめておくよ」
少し残念そうに見えるのは、演技ではなさそうだ。

「それじゃあ、そろそろお別れだ。君の幸いを願っているよ」

「……………また会える?」

「君が望んでくれるなら」

「……………必ずよ」

「——イエス、マイ・ロード」

で逢った時の様にシラヒメが恭しく一礼した。



「——グヤ! カグヤ!」

ぼんやりとした意識の中、少女のものらしい声が、自分を呼んでいるのに気付いた。

カグヤが目を開くと、泣きそうな顔をした少女が居た。年の頃なら十一、二歳。

鮮血を思わせる紅い髪と瞳の少女だ。

「……………フィーア? どうしたの?」

「——! カグヤ、大丈夫!? なんともない!」

泣きそうだった顔をくしゃくしゃにし、歓喜と驚愕がないまぜになった表情で、フィーアが問いかけてくる。

「……………うん、平気」

周囲を見渡せばフィーア以外の人間も居た。〈教授〉を始めとする〈ミラージユ〉のスタッフ達だ。

フィーアのように、ほつとした表情の者も居れば、信じられないものを見たという顔の者も居る。無論、無関心な者も。

「……………あたしは、どうしたの?」

皆を代表するように〈教授〉が一步、こちらに歩み寄った。

「お前さんは〈シラヒメ〉に呼ばれたんだ。俗に言う精神感応に近い現象なのか、体験した人間にしか判らんが……………何を見た? 精神汚染の心配は無さそうだが」

「……………シラヒメに会った。仮想空間とかいう場所で話をした」

ぼつりぼつりと呟くカグヤの言葉を、周囲の人間は黙って聞いた。

仮想人格の事。〈バースト・ポイント〉の存在。そしてカグヤの性質について。

「なるほど。突飛とつびな話ではあるが、考えられなくも無い。カグヤのゾイドに与える影響について、それなら説明が付く」

珍しく真面目まじめな顔をして〈教授〉が言った。

「しかし、〈爆裂地点バースト・ポイント〉とは……面白いじゃないか」

文字通り、新しい研究対象を見つけた科学者の顔をしている。

「……………」

このヒトもやはり、おかしい。

いや、おかしくない人間など、この世界には存在しないのかもしれない。

誰もが、他人に言えない事情を抱えている。

相容あひいれる事の無い価値観、欲求、願あいいがある。

それらは衝突ゆがし、歪み、いつか——壊れる。

それがこの世界をおかしくしている。

やはり壊すしかない。

そのために自分は〈魔女〉であろう。

〈女神〉になんてなれなくていい。

——『この世界はたくさんの願いや祈りで出来ている』

シラヒメの言った言葉を思い出す。

ならば——

「…………あたしの想いが世界を壊す——」

壊す。

自分の想いで。

この壊れかけの世界を——

第十四話

気付いたら私はそこにいた。

憶おぼえていたのは、私ではない『私』の記憶。

記憶の中の『私』は幸せだった。

『私』の隣には、『私』を愛してくれたヒトがいた。

無愛想で、不器用で、だけど優しいあなた。

あなたとの記憶が私を世界に繋ぎとめた。

あなたとの想い出が私を世界に規定してくれた。

今は記憶の中のあなた。

あなたが恋しい。

あなたが欲しい。

狂ほどおしい程ほどに、あなたが――

だけど、私は変わった。

もう、あなたが居なくても大丈夫。

だって私には最高のパートナーが出来たのだから。

羨うらやましい？

けどもう遅いよ。

あなたが私を見てくれなかったのが悪いんだから。

第十四話 アカイイト

機体を急旋回させると、慣性の法則に従い、身体が激しい加重Gに襲われる。歯を食いしばり、フットペダルを押し込み、機体を制御する。積んでいる武装のためか、旋回時の機体の挙動に違和感を感じる。

だが――

（思ったより操作感覚は変わらないな）

アサト・タチバナはそう感じた。

年の頃なら二十代前半の青年だ。伸ばし気味の髪は黒く、瞳の色も黒い。普段は気怠けたるく覇気の無い表情だが、今はコクピットに居るため、多少は引き締まっている。

一言で言えばどこにでも居そうな青年だ。ただし『無気力そうな』という形容詞が付くが。

だが見た目に反して、アサトはゾイド乗りである。彼の置かれている状況が、それを如実にまことに表している。ここはアサトの愛機であるゾイド――〈ヤミヒメ〉のコクピットであり、現在、彼はシミュレーションによる仮想目標ターゲットを相手にしている。

「――クノキ、そろそろ仕上げだ」

アサトが声に出して言った

『了解。マルチ・ロックオン 起 動。全 兵 装、発 射 準 備 完 了』

無機質な女声の機械音声が応える。〈ヤミヒメ〉に搭載された自律型戦術支援人工知能装置サポーター・ユニット。

パイロットの思考と状況を読み、最善の対処法を示す、もうひとりのパイロットと言える存在――それがクノキだ。

「目標、全機補足――一斉射撃！」

アサトの眼球の動きと連動した複数の照準が目標に重なり、赤く表示され――

『全 兵 装――一斉射撃』

クノキの機械音声と共に、〈ヤミヒメ〉に搭載された複数の武装が一斉に放たれた。コクピットの前方を埋め尽くしていた約三十余りの目標に『撃破』の文字が浮かぶ。シミュレーションによる仮想目標のため、実弾は発射されず、表示されるのはコンピュータによる判定のみである。

『仮想目標、全機撃破を確認』

「命中率は？」

『八割強——といった処ところでしょうか』

「ん。こんなもんだらう」

マシン・ヴォイス 機械音声と肉声のやり取り。ヒトによっては、それを空虚だと感じる者もいるかもしれない。

「……なあ、クノキ」

『はい、マスター』

間を空けたアサトに対し、クノキは即答した。

それがアサトに、続く言葉を躊躇ちゆうちゆうさせた。

「……いや、何でもない」

『そうですか』

マスター 主の問いかけに対し、サポーター・ユニット 自律型戦術支援人工知能装置はやはり淡々と即答した。



〈クスノセ機獣派遣事務所〉。

その格納庫ハンガーに、一機のゾイドが帰還した。

闇よりなお深い漆黒の戦闘機機獣。

〈コマンドウルフ〉と呼ばれる巨大なオオカミ型のシルエット。

その名は〈ヤミヒメ〉。

全高七メートルを越す機体に、このタイプとしては破格の武装を積んでいる。背部にはガトリングガンと二連装砲塔キャノン。後脚部にはミサイル・ランチャー。頭部にも近接戦闘用にバルカン砲と、二種類のブレードを装備している。髪飾りを思わせる一對の板はブレード・センサーだ。

〈ヤミヒメ 火力制圧用装備〉。

それが現在の〈ヤミヒメ〉の装備形態だ。文字通り、圧倒的な火力で標的を制圧する事コンセプトを目標コンセプトに開発された装備である。

「——つと」

〈ヤミヒメ〉の頭部に当たるオレンジ色の風防窓キャノピーが開き、パイロットであろう青年がキャットウォークに降り立った。

アサト・タチバナ。

それがこの、『無気力な若者』を絵に描いたような青年の名だ。

〈クスノセ機獣派遣事務所〉の所員であり、唯一のゾイド乗りである。

「おつかれさん、〈ヤミヒメ〉」

愛機の装甲を軽くなで、ねざら 劳いの言葉を掛けている。意外と律儀な性格なのかもしれない。

すると――

「おつかれさまでした」

アサトが声のした方に視線を向けると、少女が居た。

年齢は十五、六歳。アッシュユプロンド 灰色がかった銀髪を肩口で揃えており、瞳の色は灰色がかった黒。

肌の色は白く、東方大陸人には珍しい特徴を備えている。

いや、きょうがく 驚愕すべきはそれらの要素が形作っているのが『美少女』である点だろう。

小柄な体格に、きやしや 華奢な肢体。人形のような無表情さえ、彼女のはかな 儂げな雰囲気演出するのに一役買っている。

カスミ・シノザキ。

それがこの美貌の少女の名前だ。

書類上はアサトと同じ〈クスノセ機獣派遣事務所〉の所員であり、見習いのエンジニアでもある。〈ヤミヒメ〉の火力制圧用装備を新たに設計し直したのも彼女だ。

「どうでしたか？」

カスミが訊ねたのは当然、テストを終えた火力制圧用装備の感想だ。

「ん、よくぞここまで――って感じだな。正直、驚いた」

それはつまり――

「かなり使える」

と、アサトは遠回しに応えた。



「？」

アサトの微妙な物言いに、カスミは疑問符を浮かべた。

何か不満があったという訳ではないのだろう。だが、アサトの口調には複雑なニュアンスが感じられた。

「――」

アサトは無言で〈ヤミヒメ〉を――いや、新たに装備された武装を見上げていた。その

顔には何かを懐かしむ様な表情が浮かんでいる。

そこで気付いた。自分が再設計したその装備が、元々誰の物であったかに。

「……アヤカさんの事を考えているんですか？」

アヤカ・T・シユバイツァー。

〈ヤミヒメ〉の以前の搭乗者であり、アサトの師に当たる女性。彼女が好んで使用したが、この火力制圧用装備だとカスミは聞いていた。

「ん？ まあ、な」

苦笑してアサトはカスミに向き直った。

カスミはアサトから視線をそらす様に、少し俯うつむいた。自分は酷く無神経な事してしまつたのではないかと。そんな気がした。

「……余計なお世話でしたか？」

〈ヤミヒメ〉はアヤカの形見と言える。ただでさえ彼女の匂いが強く残っているものに、当時を再現する様な真似をしてしまった。それがアサトに複雑な想いをさせてしまったのではないかと、カスミは思い至つた。

だが――

「ちよつとした感傷だ。気にしないでくれ」

アサトはカスミの不安を一蹴いっしゅうした。

「それに、昔のままじゃないんだろ？」

「あ――はい。〈DFC〉の余剰出力でEシールド・ジェネレーターは稼働できます。なのでサブ・ジェネレーターは装備せず、HTBの使用が可能です」

ハイブリッド・スラスタT・バインダーBとは、〈ヤミヒメ〉の左右腰部から突き出ている装備だ。名前の通り推進器とホーミング・レーザー、姿勢制御装置の二つの役割を果たす。

〈DFC〉搭載後――つまり、アサトが搭乗するようになってから追加された装備でもある。

「これにより、火力制圧用装備でも〈ヤミヒメ〉の最高時速は二四〇キロまで出せますし、運動性能にも問題はありません」

「すごいじゃないか」

アサトは多少大げさに称賛して見せた。

「――すごい過ぎるんです」

「ん？」

「本来、こんなスペックは〈コマンドウルフ〉にはあり得ないんです。〈ヤミヒメ〉が突

出した個体である事は認めます。それでも、仮に突然変異だとしても、明らかに異常です」
アサトは黙ってカスミの言葉を聞いた。

「まして、アヤカさんが乗っていた頃には〈DFC〉も積んでいなかった……。アサトさん、〈ヤミヒメ〉って何なんですか？」

「……………」

アサトは無言。

カスミはなおも続ける。無口を絵に描いたような少女にしては珍しい事だった。

「クノキにしてもそうです。あんな高性能な人工知能が、この惑星^{ズィー}Ziに存在するはずがないんです」

「……………」

「……………」

沈黙。

言葉は無く、互いの視線のみが交差する。

先に根負けしたのはアサトだった。やれやれといった仕草で、視線を〈ヤミヒメ〉に向けて言った。

「〈ヤミヒメ〉は普通の——いや、確かに強い自我と力を持った個体ではあるが、あくまで普通の〈コマンドウルフ〉だ」

「じゃあ、クノキは……?」

アサトは一拍置いてカスミの問いに応えた。

「クノキは——〈オーガノイド〉だ」



かつて戦争があった。

〈西方大陸エウロペ戦争〉。

それは〈オーガノイド〉争奪戦とも呼ばれていた。

戦争中の二大国家が血眼^{ちまなこ}になって求めた、ゾイドコアを異常活性化させる〈オーガノイド・システム〉。その大元になるもの——それが〈オーガノイド〉と呼ばれる存在だった。

正確な記録は残っていない。〈凶戦士〉と呼ばれたウミサソリ型ゾイドや、かの英雄バン・フライハイトが連れていた銀色のゾイドがそうだとも言われている。

ただ、確実に言える事がある。それは〈オーガノイド〉を手にしたゾイド乗りは、絶対無比の力を得るという事だ。



「……〈EOS〉？」

カグヤ・イザヨイは聞きなれない単語を舌の上で転がした。

見た目は二十代前半位の歳の娘だ。適当に切り揃えた様な黒髪は所々で長さが違っている。瞳の色も同じく黒いが、その右目は眼帯で覆われているために見る事は出来ない。

冷静に観察すればかなりの美人である事が判るが、気付ける者はそう多くない。誰もが彼女の纏う暗い雰囲気^{まじ}に当てられ、正視する事が困難だからだ。

「そう。〈エミュレーティング・オーガノイド・システム〉、それがファイアだ」

カグヤの問いに応えたのは四十絡みの男だった。特に特徴と言った物はない。ぼさぼさの白髪交じりの髪と、よれよれの白衣、科学者然といった風体^{ふうてい}から、ただ〈教授〉と呼ばれている。本名は知らない。

場所はZOITEC不正規技術開発部門〈ミラージュ〉にあてがわれた施設の一室。ベッドがひとつ置かれており、そこには十二、三歳位の少女が静かに眠っている。

紅い髪と瞳の少女——名をファイアという。

突然倒れたファイアをカグヤが医務室に運び込み、彼女を〈教授〉が診察したのが十数分前だ。とりあえずは落ち着いているファイアを寝かせたまま、〈教授〉は唐突に話を切り出した。

「……何なの？〈EOS〉って」

ファイアに向けていた視線を〈教授〉に戻す。カグヤの身体^{からだ}の動きと共に、ぞろりとしたゴスロリ衣装が衣擦れの音を立てた。

「何から説明したもんかな……まず〈オーガノイド・システム〉からか」

〈教授〉はもったいつけるでもなく、上手い言葉を探している。

「そうだな。まあゾイドコアを異常活性化させるシステムだと思ってくればいい。〈ブレードライガー〉や〈ストームソーダー〉、お前さんの〈シラヒメ〉の大元でもある〈ジエノザウラー〉なんかが搭載して、絶大な戦果を上げた」

「……………」

カグヤはただ無言で話を聞いている。

「だが、〈オーガノイド・システム〉には致命的な欠陥があった。極端に乗り手を選ぶ事

だ」

言うまでもなくゾイドとパイロットには相性がある。その延長線上にある問題だとカグヤは理解した。

「これが兵器としての信頼性に劣るって言うんで、早々に〈オーガノイド・システム〉の研究は打ち切られ、後のゾイドには使われていない」

それはそうだろう。優秀な兵器とは、強力であればいい良いという物ではない。誰が使っても一定の効果が得られる事がまず重要視される。

「だが、表沙汰ぎたに出来ない理由もあった。それが〈凶戦士事件〉だ」

〈オーガノイド〉を巡る戦いとも言われた〈西方大陸エウロペ戦争〉。

その終盤の陰で起きたひとつの事件——それが〈凶戦士事件〉である。

〈真オーガノイド〉と呼ばれた巨大ウミサソリ型ゾイドの暴走に端を発した事件は、二体の〈オーガノイド・システム〉搭載ゾイドによって終結した。破滅に向かう世界の片隅で起きたひとつの事件と、ひとつの奇跡。それを知る者は、現在ではほとんど居ない。

「でだ、あれやこれやのうちに戦争は新たな局面に突入、〈オーガノイド〉の研究は禁断タブの技術として闇に葬ほうむられた——はずだった」

「……『はずだった』?」

思わせ振りの〈教授〉の口調に、カグヤはオウム返しに言った。

「〈オーガノイド〉にまつわる逸話いっわには続きがある。〈オーガノイド〉そのものである〈真オーガノイド〉が死の間際に生み出した存在、それが『ヒト型の〈オーガノイド〉』だ」



「ヒト型の〈オーガノイド〉……ですか?」

カスミは半信半疑といった口調で言った。

それはそうだろう。ヒトとゾイドは進化の過程で分岐した存在だ。生身の身体からだに優れた知性を得たのがヒトであり、金属の身体に優れた戦闘能力を得たのがゾイドである。もしヒトの知性とゾイドの戦闘能力を持った存在があったとすれば、それは究極の生命体と言える。

しかし生命とは何かしらの欠陥を抱えているものだ。それ単体では完璧と呼べず、互いに補完し合う必要がある。ヒトなどはその典型だ。

ゾイドもそうだ。ヒトが乗り込んでこそ、兵器としての威力を発揮出来るでき。これはゾイドにとって本意ではないかもしれないが、ゾイドの闘争本能を引き出すのはやはりヒトな

のだ。

惑星Ziの歴史——それはそのままヒトとゾイドの関係性の歴史と呼べる。古くからあるいは世界の始まりから、ヒトとゾイドは寄り添いあって生きてきたのだ。

だからこそヒト型の〈オーガノイド〉などあり得ない。それは在^あってはならない。

「……………」

「信じられない話かもしれないが、クノキがヒト型の〈オーガノイド〉だった事は事実だ」

「『だった』?」

今日は聞き返してばかりだとカスミは思う。

「……今は〈ヤミヒメ〉の中で眠ってる。表に出てるのは、わずかに残った彼女の残滓^{ざんし}と、〈オーガノイド〉としての特性^{だけだ}」

『彼女』という単語に、カスミは特別なニュアンスを感じた。アサトの雰囲気若干変わった事もあるだろう。これ以上は訊^きいてはいけない気がした。



「紆^{うよきよくせつ}余曲折あつて〈ZOITEC〉社はヒト型の〈オーガノイド〉の存在を知った。それを何とか人工的に再現^{でき}出来ないかと考えた。後の事は想像^{でき}出来るだろう?」

〈教授〉は何でもない事のようにカグヤに問いかけた。

恐らくは、まともな倫理観のある者なら顔をしかめる様な実験が行われただろう事は、カグヤにも容易に想像が付いた。

「……その結果が、フィーア?」

「そうだ。計画を知ったヒト型の〈オーガノイド〉は、パートナーであったゾイド乗りと共に姿を消した。だが、当時の研究チームは残された『彼女』の体細胞をクローニング技術で培養し、研究を続けた」

カグヤはただ無言で聞いた。

「計画で生み出された『実験体』は酷^{ひど}い有様だったよ。およそヒトとは呼べない姿をもって生まれ、即座に『処分』された。当時の私はぞつとしたよ。これが人間のやる事か、つてな。同時に、またそんな感情が自分にある事にも驚いた」

滔^{とうとう}々と語る〈教授〉の目はカグヤを見ていなかった。

「だから四番目の実験体がヒト型をしていた事に私はほつとした。ヒトには有り得ない綺麗な紅^{あか}い髪と瞳をしていたが、その子はどう見ても人間の女の子だったからな。だが——」

「〈オーガノイド〉としては不完全だった」

いつから起きていたのか、あか紅い髪と瞳の少女がベッドから身を起こしていた。

「……フィーア、大丈夫？」

カグヤの問いかけに、フィーアは笑顔で応えた。

「だから私はエミュレート模倣品。〈EOS〉——〈エミュレーティング・オーガノイド・システム〉と呼ばれた」

出来損ないの模倣品。

生まれながらに存在を否定された少女。

そう語るフィーアの表情には、いつものこわく曇惑的な笑みは無かった。



フィーアの状態を確認すると、『コーヒーでも煎いれて来る』と言って、〈教授〉は医務室を出て行った。

あとはフィーアから直接訊きけという事なのだろう。

「……………」

カグヤはいつもの様に無言。その表情からは彼女の感情は読めない。

「何も訊かないの、カグヤ？」

フィーアは自らのパートナーに問うた。

「……言いたくない事なら、言わなくていい。けど、フィーアが聞いて欲しいのなら聞くよ」

せきがん隻眼の娘の表情はやはり何を考えているのか判らない。しかし、そんな変わらない態度がフィーアは嬉しかった。

「カグヤは優しいね。だから好きだよ」

「……そう」

応えるカグヤの声音はどこまでも透明だ。

「じゃあ、ここからは独り言だと思って聞いて」

「……判った」

紅い髪と瞳の少女は視線を自分の手元に戻した。

「私は生まれた時からこの姿だった。そういう存在として生み出された。だから私には記憶と呼べるものは無いはずだった。けど、私には違う『私』の記憶があった。多分それは

私の基になったヒト型（オーガノイド）のものなんだと思う」

記憶や感情は育ってきた環境によって形成される。だが稀に、臓器移植等によって、以前の持ち主の記憶や感情が引き継がれる現象が起こると言われている。魂が肉体に宿るという宗教的な意見だと、医学的には否定されているが、症例が無い訳ではない。

「記憶の中の『私』は幸せだった。『私』が好きになったヒトは、『私』が人間じゃなくても『私』を愛してくれた。その人がアサトなんだ」

「……アサト・タチバナが？」

アサト・タチバナ——〈漆黒の狂襲姫〉と呼ばれるゾイドのパイロット。

「『私』の記憶は多分 アサトと一緒に居たヒト型（オーガノイド）のものなんだと思う。けどもう彼女は居ない。だからアサトは私がもう……そのつもりだったんだけど」

フィーアは言葉を濁した。

「最近ね、そんなことはどうでもよくなって自分居るの。今はもう、私を見てくれてるヒトが居る。私のパートナーになってくれてるヒトが居る——」
わずかに間を空ける

「——カグヤが側に居てくれる」

「……………」

カグヤはただ無言。

「だからもういいの。今は私がカグヤのために何かしてあげたい」
そう言ってフィーアは視線をカグヤに向けた。

「迷惑、かな？」

紅い髪と瞳の少女は真っ直ぐに漆黒に身を包んだ娘に問うた。

「……この吐き気がするような世界が、あたしは嫌い」

「知ってるよ」

「……あたしの願いは、世界の終わり」

「そうだね」

「……あたしの想いが、世界を壊す」

「うん」

「……………」

「手伝わせて。一緒に世界の終わりを迎えよう。カグヤと一緒になら、私はそれでも構わな

い」

カグヤには救いが必要だ。

自分にカグヤが居るように、カグヤにも自分が必要だ。

そうあつて欲しいとフィーアは思う。

だから――

「大好きだよ――カグヤ」

漆黒の狂襲姫・第二章につづく

『機獣少女ソイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第2部』小説ページに戻る